新古典趣味

現代文藝叢書第廿九編

新古典趣味

德田秋江

現代文藝叢書

第二十九編

(江秋田德)

新古典趣味

この小册子を遠き國のアーサー・シモンス先生に献ず

新古典趣味

近松座の天の網島

一

『天の網島』は、今から十三年ばかり前、確か明治三十三年の秋であつた。歌舞伎座で、五代目菊五郎の紙屋治兵衛で、これも先代秀調のおさんを看た。その時の記憶が今でもよく殘つてゐる。菊五郎が例の凝り性から大阪の文樂座でする人形芝居を觀て、そこに昔からの型をもたづね、

自分でも新らしい工夫をしたといふことであつた。

菊五郎は、いふまでもないが、藝術の好きな人であつた。當時六十幾つの頽齡の身を以つて、あの艶ぽい治兵衛を一つ演て見やうといふのは、自分の藝好きなパッションからであつたらう。秀調の細心な女性もよく表現されてゐた。

兎に角、私は、此度の――去年十一月の――近松座の『天の網島』を看て、近來にない、藝術から享樂することの出來る好い心持ちにならされた。

私は、東京にゐても、餘り演劇を觀に行かぬ方である。それは、東京には、餘りに試演の演劇が多いからである。東京といふあらゆる新らし

いものの醱酵地が、その大きな都會的の威力を以つて強ひる、洗練の足りない生硬な藝術は、私の趣味に取つては、實に堪へ難いことの一つである。

奈良や京都の寂びた寺院の庭にたゞ獨り立つて、完成された古代の建築美術が與へてくれる沈靜な藝術的快感に耽溺して、疲れ荒んだ自分の精神を痛はり慰めやうと思つたのも、それであつた。

去年の一月の大火で、古い南地の大半は燒失して、其の跡に感じの落着かない新築の家屋が建つてゐるけれど、幸にして河岸向の宗右衞門町から、大阪趣味の精粹を發揮してゐる島の内一圓は無事であつた。九郎右衞門町、難波中筋、二番町も、近火で、まだ昨夕からの歡樂の夢の覺め果てぬ流連の客を驚かしたのみで、類燒を免かれた。心を合はしたやうに整然と建ち列なつた貸座敷は一樣に洗ひ磨いて古い木理の露はれた千本格子の店前に昔のまゝの意氣を見せて、門行燈の文字が席、浮かれぞめきの仇淨瑠璃、役者物眞似納屋端唄、二階座敷の三味線に、今も黄金が木の葉のやうに散る處である。此の一廓の行燈の火影を慕ふぞめき歩きが、愛慾に疲勞したる廢墟のやうな私の胸に、如何に懷かしい情思を煽るであらう！

學問完成の爲でもなく、外國漫遊の爲でもなく、たゞ私は廣い世間が見たかつた。人間が見たかつた。と『片戀』の主人公が語つてゐるのと同じやうに、私は遠い外國でないまでも、たゞ、昔し近松や西鶴によつて

藝術にせられた大阪の人間の傳統的生活の態が見たかつた。

若い婦人子供が、芝居茶屋の女中に送られて、場内に入つて行く時の、その足つきのやうに、逢ひ度い女に逢ひに行く夜途のやうに、私は心いそ〳〵として近松座に入つた。せめてそれだけの快よい昂奮ですら近頃の私には稀らしいことであつた。

私の座席の四周は、派手な大島袖やお召を着た大阪の藝者や、花柳界の婦女と餘り身裝風俗の違はぬ大阪の街の婦人達で充されてゐた。香油の薫と白粉の匂とが一つになつて、何よりも先に私の臭官をして、極めて濃厚なる藝術的氛圍氣の内に在ることを鋭く感せしめた。

二

前狂言の「八陣守護城」は省いて『天の網島』は、新地茶屋の段を、口を鍛太夫が語る。

幕が明くと、下手入口に澁木綿の納簾。入口右手の格子前に河庄と一字書きに書いた行燈を懸け、左手の板壁際に用水溜を置く、凡て河庄方表座敷の誂へ。

下手に寄つて、客愛相のよささうな、律義な表情をして、河庄の女房の花車、意氣な女房髷に水色の襦袢の半襟、洒落れた薩摩縞の着付。一人火鉢の傍に坐つて火箸を弄びゐる。鍛のよく透る聲で、強い三味線の調

子面白く『橋の名さへも梅櫻、花を揃へし其中に、南の風呂の浴衣より今此新地に戀ひ衣。紀の國やの小春とは、此十月に仇し名を、世に遺せとの兆かや。今宵は誰れか呼子鳥。覺束なくも行燈の、影ゆき違ふ妓の立ち歸り』と淨瑠璃につれて上手から二人の妓が來掛ると、下手から小春、濃い水色の紋付に、白と赤との菊を染め拔いた裾模樣の着付。淡紅色の裾廻し。緋縮緬の下着。白い襦袢の襟の下前を赤く裏返した遊女の好み。多い髪を島田に束ねて、河庄方へ入らうとする。そこを、他の妓から、

『ヤ小春樣か、何といのふ。互に一座も打ち絶え、貴面ならねば便りも聞かず、氣色がわるいか、顏も細り窶れさんした。誰やらが咄しで聞けば紙治樣ゆゑ、內からたんと客の吟味に遇はんして、何處へもむざと送らぬの、いや太兵衞樣に請け出され、在所とやら伊丹とやらへ往かんすはずとも聞き及ぶ。何うで御座りやす。』と話し掛けられ、

『ァ、もう伊丹〳〵と云ふて下んすな。それで痛み入るわいな。最惜しなげに紙治樣と私が中、さほどにもない事を、あのせいこきの太兵衞が浮き名を立てていひ散らし、客といふ客は退き果て、內からは紙屋治兵衞ゆゑぢやと、せく程に〳〵、文の便りも叶はぬやうに成りやした。不思議に今宵は侍衆とて、河庄方へ送らるゝが、斯う往く道でも若し太兵衞めに逢はうかと、氣遣ひさ〳〵。なんと其處邊に見えぬかへ。…』

といふやうなことを立話しに話し合ふ。

氣色が惡いか、顏も細り窶れさんした。といへど、小春の人形の表情は、惜むらくは、淋しみが足りない。さうして顏から身體の全體があまりに小娘々々してゐて苦界に身を沈めてゐる女とは思はれない。もつと神經質な、そして張りのある、弱いながらも何處か强味のある顏をしてゐなければならぬ。

『オ、夫ならちやつと外さんせ。アレ一丁目から、なまいだ坊主が、てんがう念佛申して來る、その見物の中に、のんこに髮結ふて、野良らしい、伊達衆自慢といひそな男。慥に太兵衞樣かと見た。あれ〳〵爰へ。』

と氣を付けられて、小春急いで河庄の納簾の蔭に驅け込むと、女房勇んで、

『これは〳〵早いお出。お名さへ久しういはなんだ。やれ珍らしい小春樣〳〵。はる〴〵で小春樣』と高聲にいふを小春制して、

『コレ門へ聞こえる。高い聲して小春〳〵といふて下んすな。表に嫌な李韜天がゐるわいの。密かに〳〵頼みやす。』と言つてゐる處へ、

大きなのんこに髮を結ふた太兵衞、荒い立縞の傳法な羽織を着て、淺黑い苦みの勝つた顏をして、遊び仲間の善六を連れてツカ〳〵と座敷に通り、

『小春どの。李韜天とは好い名を付けて下された。先づ禮から云ひましよ。ナァ善六、內々話した。心中よし、意氣方よし、床よしの小春どの。やがて此の男が女房に持つか、紙屋治兵衞が請け出すか。張り合ひの女

郎近付きに成つて置きや。』

と、厭味を言ひつゝ小春の顔前に顎を突出す。小春成るだけ對手にせぬやうに、

『ェイ聞きともない。得知れぬ人の仇名立て。手柄にならば精出して云はんせ。此の小春は聞きともないに。』

と、落着いて言つて置いて、少し顔を横に向ける。すると、太兵衞は、一層傍に顔を摺り寄せ。

『聞きともなくとも、小判の響きで聞せて見せやう。』

と、懐中の黄金をたゝく眞似をしながら『貴樣もよい因果ぢや。天滿大阪三郷に男も多いに、紙屋治兵衞、二人の子の親。女房は從弟同士、姑は伯母聟。六十日の問屋の仕切りにさへ追はるゝ商賣、十貫目近い金出して、請け出すの、根曳きのとは、螳螂が斧で御座る。我等女房子なければ、姑もなし、親もなし、伯父持たず、身すがらの太兵衞と名を取つた男。色廓で潜上いふ事は治兵衞奴には叶はねども、金持つたばかりは太兵衞が勝つた。金の力で押したらば、なう善六。何に勝たうも知れまい。今宵の客も治兵衞奴ぢや。貰う貰う。此の身すがらが貰ふた。花車酒出しや〳〵。』憎々しげに言ふ。

小春は、此の間、一度些と太兵衞の方に顔を向けかけたが、直ぐ復た横を向いて、素知らぬ振りをしてゐた。花車も斯ういふ惡態な客には馴れ切つたやうに、温順しくして最前から靜かに長煙管を取つて煙草を吹

かしながら聞いてゐたが『酒出しや〳〵。』と言はれて初めて少しく太兵衛の方に顔を向け、

『ェ何おしやんす。今宵のお客はお武士衆。押ッ付け見えましよ。お前は何處ぞ他で遊んで下さんせ。』と、きつぱりと言ふ。

認か、器量を下げたわけであるが、太兵衛、そんなことを言はれた位では一向後れず。『ハテ武士客。刀指すか指さぬか、武士も町人も客は客。何本差いても、五本六本は差すまいし。よう差いて刀脇差たつた二本。武士ぐるめに小春殿貰ふた。拔けつ隱れつ成されても緣有ればこそお出合ひ申す。……』と、減らず口を叩いて治兵衛と小春との事を淨瑠璃にして語つて聞かさう。善六語れ。と言ひつゝ、太兵衛は箒木を取つて三味線を彈く眞似をし、戯弄けた仕草で、紙屋の治兵衛小春狂ひが杉原紙で、一分小判紙塵々紙で、内の身代漉き破れ紙の鼻もかまれぬ。紙屑治兵衛……と、駄洒落れる。

先年、歌舞伎座の時には、太兵衛は幸藏であつたかよく記憶せぬが、善六は確か蟹十郎であつたと思ふ。大阪式の道化役をよくしてゐた。

さういふ茶利な仕草を觀てゐる間に、私の聽官と視官とは巧みに混亂させられて十分なる藝術的イリユウジヨンに魅せられた。他の方で語つてゐる淨瑠璃の、地の文句の說明や個性に從つて語り分けられる役々の科白が、舞臺の上の人形の動作や思入れとピタリ一致して見えて來た。調子の高い太棹のメロヂイの作用によつて、無いことも有ることのやう

に感せしむる音樂に欺むかれつゝ何時となく假感の世界に入つた頭には、宛然人形自身が眞個に口を利いてゐるやうに思へて、それに對して少しでも疑ひを持つやうな意識は消滅して了つた。

荒くれて野卑な容貌をした太兵衞と善六との惡戯弄けな騷々しい動作や科白を觀てゐる傍に、大理石の樣な眞白い沈靜な表情を遂に改めたことのない花車と小春とが常に默つて靜としてゐるのが、却つて活々として私の眼に映つて來た。

散々騷いでゐる處へ黑い宗十郎頭巾に深く面を包んだ黑紋付の羽織袴に、大小を差した武士客が下手から立ち表はれて人目を忍んで入口に立ち、一寸家內の樣子を伺ひつゝ納簾を分けて奧に入つて行つた。それを看た太兵衞、

『ソリヤ塵紙わせた。ハテきつい忍びやう。何故這入らぬ塵紙。太兵衞が淨瑠璃恐いか……』

と言ひつゝ、傍に立寄つて引摺り入れやうとしながらその姿に氣が着くと、大小挾んだ眞物の武士である。眼だけ顯はした顏でグッと睨みながら

『何が紙屑治兵衞だ……』と言つて、應揚に上手に坐ると、太兵衞いよ〳〵器量を下げたが、それでも尙ほ痿んだ顏を隱して『なう小春。此方は町人、刀を差いた事はなけれども、己が所に澤山な新銀の光りで、少々の刀も捻ぢ曲めやうと思ふ物。塵紙屋めが漆漉しほどな薄元手で、此の身すがらと張り合ふは慮外千萬。櫻橋から中町下りぞめいたら、何處ぞでは

紙屑踏み躪つてくりよう。善六おぢや。』と、贅をコキながら歸つて行く。

武士の客は所柄馬鹿者には構はず、堪へて靜とそれを聞き流してゐる。その傍には小春、端近い店の間で、先刻から紙屋〳〵と、治兵衞が善し惡しの噂さを人に聞えよとばかり、太兵衞善六に叫き散らされたのが、ギクリギクリと身に應へ、傍の客には挨拶もせず、只管に思ひ頽れて、うつとりとなつてゐると、武士客、

『此の方の屋敷は晝さへ出入りかたく。一夜の他出も留守居へ斷り帳に付け、六かしい掟なれども、お名を聞いて戀ひ慕ふお女郎。何うぞと一座を願ひ、小者も連れず、先刻參つて宿を賴み、何でも一生の思ひ出にお情に與らうと存じたに、いかな、につこりと笑顏も見せず、一言の挨拶もなく、懷中で錢よむやうに、さて〳〵うつぶいてばかり、首筋が痛みは致さぬか、何と花車殿、茶屋へ來て產所の夜伽をすることは竟におぼえぬ。』とつぶやく。

此の邊の小春の性格姿態は、近松の原作によく表はされてゐる。今の世に言ふヒステリイで苦勞性な、思ひ込みの深い、勝ち氣で、凛と張り詰めた處があるかと思ふと、また何事に就けても直ぐ屈托し易い、弱々しくつて、我儘の處もあるが何方かと言へば肥肉でない、眉目のハツキリとした、顏のやゝ蒼白い、忍耐も强いが、また焦れる性質の女である。その女が、傍には初見の武士の客のゐるのも、また痛い勤めをしてゐれば、始終世話になつてゐて、氣を使はねばならぬ筈の『お母ちやん』——

河庄の女房のゐるのをも何時か忘れて了つて、靜と駄り込んで、一つ事を取り留めもなく思ひ耽りながら、懷にした兩手で乳の邊を抑へて、首が折れるかと思ふばかりに襦袢の襟に頰まで顏を沈めて、肩で呼吸をするやうにして、時々太い溜息を吐いてゐる凄艶を姿態が、歷々と眼に浮んで來る。作者の近松は確かに自分でも斯う言ふ女性を目擊したことがあるに相違あるまい。今もしさういふ標準から見たならば、小春の人形は、先刻も言つたやうに製作に工夫が足りない。さうして吉田文五郎の人形の使ひ振りそのものには大して不足な點はなかつたであらうが、人形そのものゝ製作の不備な爲に、十分なる感興を促起せしめなかつたのは遺憾であつた。

客の不機嫌と、小春の例のふさぎの病とを看て取つた花車は如才なく『お道理〳〵。曰くを御存じない故御不審の立つ筈、此の女郎には紙治樣と申す深いお客がござんして、今日も紙治樣明日も紙治樣と他から手指しもならず。登り詰めてはお客にも女郎にも得て怪我のある物。第一勤めの妨げと、せくは何處しも親方のならひ、それゆゑ小春樣もお氣の浮かぬは道理。サアちやと飲みかけあつさりと賴みます。小春樣、はる樣』と花車は頻りに小春の心を引立てやうとするけれど、その方には返辭もせうとはせず、ホロリ〳〵と涙の流れる顏を重たさうに上げて、『あの、お武士樣。同じ死ぬる道にも、十夜の中に死んだ者は、佛に成るといひますが、定かいな。』

と、今まで傍で何を言つても默つてゐた者が、不意に斯樣なことを言つた。それで武士も、ます〳〵呆れて、

『それを身が知る事か。旦那坊主にお問ひなされ。』

『ほんに、さうぢや。夫なら問ひたい事がござんす。自害すると、首くくるとは、必定此の喉を切る方が澤と痛いでござんしよの。』

『痛むか、痛まぬか、切つては見ず。大方の事問はつしやれ。ァ、小氣味の惡い女郎ぢや。』

と。流石の武士もうてぬ顏。と、原作に書いてゐるが、武士はその實、治兵衞の兄の孫右衞門であつて、町人が小春から、切るの死ぬるのといふことを問ひ掛けられて、ゾッとする邊に、それを承知して見てゐる者に眞個の武士でないことの微めくユウモァが面白い。

あまりに小春の言ふことが、興を殺ぐので、花車は『ェ、春樣。初對面のお客にあんまりな挨拶。些と氣を替へ、どりや此方の人尋ねて來て酒にせう。』と言つて河庄の主人を探しに立つ。此處で錣太夫は退いて、大隅太夫が代つて出る。錣も大隅も茶屋の段は、殆ど近松の原作のまゝを語つてゐる。後の伊達太夫の語る『時雨の炬燵』は原作とは大分違つてゐる。それには五行本も出來てゐて、東京でも常に語つてゐるのであるが、改作でも炬燵の場などは可いとして、後半は非道く原作の精神を打壞して、作意を淺薄なものにして了つてゐる。其の菊五郎の演た時も勿論改作の通りを仕た。その事の是非は後に殘して置いて、

三

これからがいよ〳〵縁切りの場になるのである。人形にも太夫にも十分實が入つて來なければならぬ。

『天満に年ふる千早振る、神にはあらぬ紙様と、世の鰐口にのるばかり。小春に深く大幣の〝腐り合ふたる御注連縄。今は結ぶの神無月。せかれて逢はれぬ身と成り果て、あはれ逢ふ瀬の首尾あらば、それを二人が最期日と名殘の文の云ひかはし。毎夜〳〵の死に覺悟。……』と語り出す大隅太夫の聲調は、極度に艶を消した、少しも激發のない、修練の上にも修練を積んだ結果、殆ど元の地聲に歸つた、純樸な古風な聲音で、何處まで行つても緩急の度を失はない、徐い〳〵哀愁のあるメロディである。

さうして『毎夜〳〵の死に覺悟……』といふ、さながら戀する女の敢果ない氣分のやうな節廻しを靜と聽いてゐると、發作的に、情死は美しい、温柔そのものであるかのやうな心地になつて來る。

原文に『……立ち出る門は宵月の、影傾むきて雲のあし、人足薄くなりにけり。』とあるが、宵の間のぞめき騷ぎも靜まつて三味の音色と聲音とで丁度さういふ靜かな氣分が舞臺を領してゐる處へ、下手から、白い手拭で頰被りをして、黒の絞付を着流した治兵衛が、兩手で袖を搔き合はして、さも魂拔けたやうに、うか〳〵と出て來て寂然とした四邊の樣子に心を配りながら、行燈の傍に寄つて行つて秘と燈を消す。

今其處の煮賣り屋でしてゐた小春の沙汰に、今宵は武士客で、河庄方に來てゐると知つたので、サア今宵こそと、此處へ來て、格子の間から中を覗くと、成程頭巾に面を包んだ客が小春と差向つて坐つてゐる。何を言つてゐるか、頤ばかりは動いてゐるやうであるが、言つてゐることは聞き取れない。小春はと見ると、可愛や小春は燈火に脊向けた顏が暫らく見ぬ間にゲッソリ痩せてゐる。心の中は己がことで一杯になつてゐるのだらう。爰に來てゐると吹き込んで、連れ出し、早く梅田か北野へ飛んで行きたい。……斯う思つて、治兵衞は獨りで心を焦つてゐる。此の處、人形は無言で、淨瑠璃が凡て情を抒してくれる間、格子から覗いて見たり、身を悶いたりしてゐる。

すると、奥の間では、客が大欠伸をして『思ひのある女郎衆の御伽で氣が滅入る。門も靜かな、端の間へ出て行燈でも見て氣を晴さう、サアでざれ。』と言ひながら小春の手を取つて此方に出て來る樣子。治兵衞はそれと見て急いで格子の小蔭に身を隱す。內では、治兵衞が立ち聞をしてゐるとは知らないで、件の武士の客が、小春に向つて、宵からの素振りや、詞の端といひ、花車が話しの、その紙治とやらと心中する心と見えるが、それに違ひはあるまい。死に神の付いた耳へは、異見も道理も入るまいけれどそれはよくない考へだ。さういふことをしては、先方では男の無分別は言はないで、一家一門の者がお前一人を恨むだらう。親は有るか無いか知らぬが、あれば不孝の罰。極樂へは愚か、地獄へたり

とも二人づれでは暖かに落ちられぬ。笑止の事だ。一見ながら武士の役としても見殺しにもならぬ。定めし金づくの話しと思ふが、五兩十兩は用に立てゝも助けたい。侍冥利に他言はせぬから心底殘さず打ち明けや。と深切に言ふと、

それを聽きながら、始終俯向いて火箸を取つて火鉢の灰を搔きならしてゐた小春は、少しく顏を上げて悲しい述懷をする。

大隅の、此の述懷の語り口は今尙ほ私の耳に何とも名狀し難い好い氣持ちになつて殘つてゐて、忘れられない。

大隅が此度の出し物に就いては『天の網島』は三十年振りで語るのであるが、先師繁太夫に嚴しく薫陶された敎は何時までも忘れる事が出來ない。久し振りで語るのでも、確かに語れる積りだといふ自信のある前布令であつた。純樸で平淡な調子に、女の悲しい感情で一圓に艶を着けた節が多分繁太夫の殘して行つた節なのであらう。

『ァ、かたじけない、有り難い。』と言葉で言つて、後は直ぐ節になつて、『馴染み、よしみもない私。御誓言での情のお詞。涙がこぼれて嬉しうございます。』と緩く軟かに語る。それから間々に言葉を入れて大抵は節で續ける。

『……指し合ありて今急に請け出すことも叶はず、南の元の親方と、爰とにまだ五年有る年の中、人手に取られては、私は素より主は猶一分立たず、……』の、南の元の親方と、爰とにまだ五年ある年の中。といふ處

に來て、團平の三絃は急に促迫して、三の絃に訴へた絶え入るやうな感傷的な音色になつた。語り手の聲も亦た全然涙に充ちた女の感情を表はした調子に變はる。

憂川竹の苦海に沈淪して、身の不如意を喞つ弱い女性の遣る瀬ない悲哀が遺憾なく表はされた。思ふ男との逢瀬は絶たれ、澤と恩のある親方たちへの義理は缺かされぬ。さりとて心に染まぬ男に身を任すは死ぬより痛い。思ふまゝにならぬほどならば、寧そ愛する男と死なう。此度逢ふ瀬の首尾があつたら、その時が最期の日である。死ぬる覺悟は定めてゐるが、さて何時がその最期の日となるやら、敢果ない命で、その日〳〵を送つてゐる。

此處でもし私の囑望を言へば此の時人形をして、緋縮緬の襦袢の袖を口に食へさせて、紅涙潸々の艶姿を見せて欲しかつたが、文五郎の小春は何時も唯俯向き加減に靜としてゐた。

小春は、かねて治兵衞の女房おさんから、可愛いゝと思はんす治兵衞殿の爲ぢやほどに、どうぞ思ひ切つてくれと、かき口説いた文を貰つてゐるので、女は相見互ひの事とよく合點して、身にもかえぬ大事の男なれど、思ひ切るといふ達引の強い返事を出してゐる。それがあるから死なうといふ念は幾許か變つた。で、その日送りに最期を待つてゐるものゝ、

『私一人を賴みの母樣。南邊に賃仕事して裏家住み。死んだ跡では袖乞

ひ非人の飢ゑ死でもなされうかと、是のみ悲しさ。……』

といふを口實にして、私とても命は一つ、死にともない、水臭い女と思し召すも恥かしいが、死なずに事の濟むやうに、どうぞ〳〵頼みやす。と、濕ぽい調子で哀れに述懷する。此處の『水臭い女と思し召すも……』といふ處が、また前の『毎夜〳〵の死に覺悟……』といふ處と『南の元の親方と爰とに尙ほ五年有る年の中……』といふ處と些と似たメロヂイで、そのスキートな聲音が長く私の耳底に殘つてゐて忘られない。さうして私には此の南邊とか南の元の親方とか南の風呂の浴衣とかいふことが、さも南地は古くからある狹斜の巷であるといふことを聯想せしめて、懷かしく響く。

治兵衞は此の間内の二人の問答を格子の外で聽いてゐて、本文にある通り、さては女の言つたことは皆嘘であつたかと吃驚して心を急く身振りをしてゐる。さうして遂々腰に差いた一尺七寸の關の孫六を拔き放つて、格子の挾から、此處が小春の脇腹と思ふあたりを「えい」とかけ聲諸共にグサリと突く。けれども座が離れてゐるので刀は空を刺した。それを見て武士客は飛び掛つて、刀を持つた兩手をグッと引攫んで、自分の刀の下緒を手ばしこく解いて格子に暴れ者の手を睨かと搦んだ。武士客に扮した孫右衞門は、此の時早くもそれが弟の治兵衞である事を看て取つたのである。で丁度其處へ外から歸つて來た河庄夫婦が、其の有樣を見て騷ぐのを『ア、苦しうない、騷ぐな思案あり繩解くな。』と制しながら

『サア皆奥へ。小春おぢや往て寝やう……あの、此處な狼狽者！』と、ま
す〳〵治兵衞の氣を焦らすやうな、そして叱り付けるやうな兩途かけた
棄て科白を殘して小春の手を取つて奥へ入らうとする。（此處の處が、近
松の原文をも少し引き伸ばして科白を多くしてゐたやうであつたが、勿
論大體には違ひない。小春は先刻からその刀を熟々見てゐたが、目覺え
のある刀でハッと胸を貫き。あれ治兵衞さんと、思はず口に出たのを堪
へて、『醉狂の餘り色廓には有るならひ、沙汰なしに往なして遣らんした
ら、ナァ河庄さん、私やよさゝうに思ひやす。』といふやうなことを言つ
て、餘處ながら外の男を庇はうとする。――私は斯ういふ處を讀む毎に、
巢林子が如何に心容の寛大にして萬人の胸に自己の心を置いてゐたかを
思はせられるのである。――
小春が、たつてさう言つて賴むのを、いかな〳〵身次第にして皆這入
りや。と外を押隱すやうにして小春を急く。小春は手を取られながら、後
を見返へり〳〵入つてゆく。
しかし此處の處でも、後の緣切りの場でも、治兵衞や孫右衞門の動作
が、あまりに小さく繁雜であつて、人形の使ひ振りがスッキリしたとは
言ひ兼ねた。何となく舞臺が狹苦しいやうに思はれた。さうして其の不
滿足な感じは、最後の炬燵の場のお、さん一人の活躍によつて遺憾なく拭
ひ清められた。
それ等のことは後にゆづり。治兵衞は一人兩手を格子に縛られたまゝ

悔し涙に身を悶いてゐると、其處へ最前の太兵衛と善六とがぞめき戻りにまた來掛つて治兵衛が格子前に密んでゐるのを認め、『やァ治兵衛がゐる。』と言ひさま毆つたり蹴つたりする。さうせられても唯『あいた。あいたい。』と身を苦しむばかりで、ねつから起き上がらうともせぬので、ナニ？　逢いた、逢いたいければ逢して遣らうと言ひつゝ、また蹴り付けやうとしてよく見ると、治兵衛は格子に縛られてゐるので、『コリヤ治兵衛が縛られてゐるわい。』と、二人はさも好い氣味だと言つたやうに笑ひ騒ぐ。此の間治兵衛の白手拭の頰被りは取れて落ち、伊達に結つた髪の鬢が亂れ、薄色の水淺黄の献上の博多帶が解ける。

『ヤァ紙屋治兵衛が盗みをして縛られた。』と、町中に響くやうに奴鳴る。

此處で原作には無いが、太兵衛は治兵衛と單に情敵であるばかりでなく、治兵衛に對して貳拾兩の債權者たる關係に改作してある。五代目の演たのもさうであつたし、それが普通になつてゐるが、敵同士の關係を因果的に複雜にせねば劇的滿足を十分に感ずることの出來ぬ、兎角臭草紙趣味の癖であるが、それは餘りに惡毒い。矢張り原作のまゝが好い。

常識を重んずる孫右衛門は、また世間の手前を最も重ずる。紙屋治兵衛が盗みをしたと、呼ばはり散らすものがあるので、暫らく懲らしめに、そのまゝにして置かうと思つたけれど、流石に聞き棄てにならぬので、狽てゝ奥から飛んで出で、

『治兵衛が何を盗んだ、盗人呼ばはりはうぬか。サァ吐かせ。』と言ひさま、

太兵衛善六二人を小突き廻す。そこで、太兵衛はかねて治兵衛から入れてゐる借金證書を此度は武士の前に差出して讀んで聞かす。それを聞いて、武士は即座に懷中から貳拾兩の小判を取出して、『サア持つて失せ！』と、イヤといふほど太兵衛の面に投げ付ける。太兵衛は痛さうに顔を抑へてゐたが、よく見ると、それが小判であつたので、喜んで、卑屈らしう請取つて、尙ほ散々治兵衛の惡態を棄てぜりふに言ひながら、武士の權幕が恐ろしいので、善六とあはてゝ鉢合せをしたりして歸つて行く。

近松自身も、深い用意があつたか何うかは分らぬ、隨分太兵衛などのやうな二枚目三枚目の端役では觀客の肩の張らぬやうに道化を見せるつもりであつたのかも知れぬが、暫らく原作の表面に表はされた處で判斷をすれば、近松座の太兵衛は餘りに蕪雜で淺薄で茶利過ぎてゐる。身すがらの太兵衛は、もう少し苦く引締つた男にしても可い。覆面の武士に一つ小突かれてすぐ平太張つたり、證文を見せて強いことを言つてゐて、本當ならば禮を言つて返すべき小判を顔に投げ付けられて、黃金と見れば、嬉しさうに氣嫌を直して戴くやうにして受取つたりするのは、仕なくつても可い藝を演て折角の性格を無殘々々打壞すことになる。さういふやうな輕躁な蕪雜な科白や仕草が獨り太兵衛ばかりではない、すぐ後の治兵衛が小春への恨みを言ふ態度などにも禍してゐたし、炬燵の場の後半にもさういふ無鑑識の改惡が隨處に累をなしてゐるのは惜しい。

また元へ戻つて、

治兵衛は、此處で非常な神經の激動を感じたわけである。三年の間思ひつめてゐた女の言つてゐたことは皆な詐りであつた。情敵には散々な恥辱を蒙らされた薄情な女を刺さうとして刺し過り、却つて知らぬ武士の客にその手を取つて格子前に縛られたといふ憂き目を見た。さうしてその武士の客は、今、家内で小春と囁き合ふてゐたのを聞けば、彼の女が今は腹心を打ち明けて信頼する唯一の人である。「心の中は皆己れがこと」とまで、小春の胸は全部自分で占領してゐると思ひ込んでゐたにも係らず、その小春は女から見れば頼母しさうな武士の客の意に從はうとしてゐる。さうしてその武士は一度狼藉者の手を縛つて

また自分でその縛めを解いた上に大枚貳拾兩の小判を投じて遊蕩の爲に亂用した借金を返して危急を救つてくれた人間である。斯うして武士の客は治兵衛に對して實に生殺與奪の權威を以つてゐるのである。絶望と恥辱と憤怒と悔恨と執着とは二重にも三重にも治兵衛の身を引縛つてゐるのである。太兵衛に對しては單純に敵意を持つことが出來る。然るに今また新に女を取られ樣とする武士に對しては、單純に敵意を持つことが出來ぬ苦しい義理に陷つてるである。それにも係らず、此處で截然さういふ心持ちを感せしむる幻覺が生じなかつた……何故だらう？　一つは武士が本當の他人の武士でないことを吾々觀てゐる者が知つてゐた所爲もあらう。また一つはさういふ標準から見た治兵衛は元より美貌でもな

ければならぬが、同時に如上の苦痛を表はした表情（エキスプレッション）をしてゐなければならぬ。然るに縛（いまし）められた手を解かれ、頬被りを取つて始めて正面を向いた顔を熟（よ）く視ると、人形の製作は唯美貌といふことを單一な條件として造られたものであつた。色白く頬肥えて今日の大阪でも屢々見る普通（たゞ）のボンチであつた。或はそれでも亦た可いかも知れぬが、演劇が實人生の壓縮であつて人形芝居が更に條件を狹められてゐる以上は苦勞なげなる單純な美貌に苦痛の感情をも混へて表現して欲しかつた。さうでないが爲めにひどく深刻であるべき味を稀薄なものにした。そも〳〵何人が言ひ始めたか知らぬが、昔しから「縁切り」といふ言葉がある。「縁切り」は男女間の情事の經過（プロセス）の中で假（よ）しそれが如何なる内容の意味と外面の樣式とを有してゐる場合であつても、最も哀切にして多恨なる焦點を表はした部分である。治兵衛は生涯に其の哀切多恨なる縁切りを二度までしてゐる。新地茶屋の段の縁切りが何となく哀切と深刻との味に缺けたのは小春と治兵衛と二人の容貌の單調がその原因の一つであつたに違ひない。

桔梗の五つ紋、黒羽二重に水色の裾裏の上着に派手な薄紫の龜甲形の模樣を置いた下着。下に黒い半襟の襦袢を重ねてゐるのが、胸元搔き亂れ、裾前しどけなく、下着の赤の胴抜きが露はに見えてゐる。治兵衛はその亂れた身裝（なり）で舞臺中央の前に寄つて、さも面目なさゝうに俯向き加減に膝を突いてゐると、件（くだん）の武士、此處で始めて長い間包んでゐた宗十

郎頭巾を解き〳〵、治兵衛の横顔に寄つて行つて、脱いだ顔をそつと突き出す。治兵衛は何氣なく、それを見ると、焉ぞ測らん、武士の客と思つたのは實の兄孫右衛門であつたので、

『ヤァ兄者人、アッ面目もない！』と、言つたきり穴にも入りたい心地になつて袖で面を隱し、身體を低く縮めて擦り脱けて逃げやうとする。それを孫右衛門遣らぬと捉つて押へ『ヤィ〳〵〳〵たはけ者め！』と叱り付け、そのまゝ其處で、『人を賺すは遊女の商賣。今目に見えたか。云々』といふ長い科白で治兵衛に强意見をする。それから二人連立つてまた家に入ると、それを機會に小春奥から『さては兄御樣かいの。』と言つて走り出る。治兵衛は兄の背から拔けてその方に突と近寄り、小春の胸倉を取つて引き据ゑ『畜生め、狐め、太兵衛より先にうぬを踏みたい。』と足を上げて蹴らうとするを孫右衛門制して、『ヤィ〳〵〳〵そのたはけから事が起るわい。小春を踏む足で、狼狽へた自己が根生をなせ踏まぬ。云々……』とまた孫右衛門の長い切諫になる。原作で殆ど立てつゞけになつてゐる長い科白を、幾分かづゝ改竄したり何度にも割つたりして、變化を附けてゐるのは惡くない。

『……女房子にも見替しは尤も、心中よしの女郎。ァゝお手柄々々。結構な弟を持ち、人にも知られし粉やの孫右衛門祭の練り衆か狂か。竟に差さぬ大小ぼつこみ、藏屋舗の役人か、歌舞伎役者の眞似をして、痴を盡した此の刀、おれや〳〵捨て處がないわいやい……』と言つて、男泣

きに泣く。

小春は聞いてゐて『皆なお道理』と一口言つたのみで、始終袖を眼にあてゝ泣いてゐる。

これから治兵衛が悔し涙に大地を叩いて、存分に小春に恨みの腹癒せを言ふ處になる。此の場では眼目の處である。『誤つた〳〵兄者人、三年前より、あの古狸に見入れ』とか『小春といふ屋尻切りに賺され。』とか『ヤイ狸め、狐め、屋尻切りめ。』と言つてコキ下してゐるものゝ心の底を叩けば可愛さゆゑに憎い。今まで深く思ひ込み、惚れ抜いてゐる心には、どうして〳〵容易く思ひ切れるものではない。『後悔千萬、ふつつり心殘らぬ。』『思ひ切つた證據これ見よ。』と、潔く廿九枚の起請を守袋から取り出して、小春にはたと投げつける。もし此の際眞個に心殘さず思ひ切つたものならば冷淡になつて了つて恨みなどいふのも怠儀だ。といふ氣になるものだ。治兵衛は然らず、若し制する兄がゐなかつたら、屹度小春の肩先か手首に認か喰ひ付いて白く柔かい肉膚に斑々たる紅紫の齒痕を殘して、僅かに憤恨を癒したであらう。

菊五郎のはそこまで精しく記憶せぬが、熱情的な意氣込みは十分あつたらうと思ふ。近松座の吉田玉造の人形はさうでなかつた。前言つたやうに人形その物が沈痛と熱情とを缺いてゐる上に、たゞ場當りに着物の着付をわけもなく亂したり、大隅の此の際の語り振りも餘りに輕妙の度を通り踰して、徒らに浮戯に墮した憾があつた。熱情に燃えて火の樣に

なつてゐる治兵衛を活現するにしては、大隅の聲調は急き込みが足らぬ。大隅の懷古平遠な哀愁を湛えた聲音は、唯遣る瀬無氣なる小春の述懷に適してゐた。悲憤激越の調は彼れの特意ではない。

『兄者人、彼奴が方の、我等が起請、數改め、請け取つて貴方の方で火にくべて下され〳〵。サア兄貴へ渡せ。』と治兵衛が急くのでたゞ『心得やした。』と一言いひさま小春は懷中から廿九枚の起請を取つて、涙と共に投げ出す。孫右衛門はそれを取上げて一、二、三、と數へ行く間にフト違つた一通の女の文を見て、『こりや何ぢや』と言ひながら、開かうとするのを、小春あはてゝ、『ァ、そりや見せられぬ大事の文』と言つて取り付かうとする。孫右衛門は高く片手に差上げて、上書を見ると、小春さまなゐる、紙屋内さんよりとある『ウム〳〵』と首肯きながら默つて讀み了り、『ぢや此の狀の客に義理を立てゝ……イヤのう小春殿、最前は侍冥利今は粉屋の孫右衛門商ひ冥利、女房限つて此の文見せぬ。われ一人披見して、起請と共に火に入れる。誓文に違ひは無い。……最前の水臭い心中は此の狀の客があるから……道理ぢや〳〵。』

と言つて、一方、遊女には似ぬ小春の心底に今更ら感じ、その義理に謝し、一面、治兵衛の知らぬ、まだ他の馴染の客のあるやうに詐り微意かす。治兵衛は、さう言はれて、ます〳〵氣を急き、『兄者人一寸見せて下され下され。』と、頻に見たがつて立つて行つて横からそれを奪はうとする。孫右衛門は始終小春の方に言葉を向けて『この客があるから……』

と、聲高に繰返へし〳〵お前の腹はよく分つた。と納得するやうに諷してゐる。で、既での事で、治兵衛にその手紙を奪られやうとしたので、此度は他の手に持ち換へ。『ナニ何だ？』と、治兵衛の方を向いてまた叱る。すると治兵衛はまた元の座に平太張つて氣を變へた調子になり、

『イヱ、……その……何でもござりませぬ。』と、極めて輕口に言ふ。其處が一寸お可笑味になつてゐて、觀客の笑ふ處であるが、それが前に言つた大隅の浮戯に墮した點で、私は寧ろそれを厭ふ。

それから孫右衛門は、また小春の方に向き、また氣を換へて、『……此の狀の客に義理が立つまい……。』と、キッパリとなる。それを言はれた機會に、小春はウンと一つ胸を抑へて、それからその手を膝に持つて行つてトン〳〵と平手で叩きながら强く決心した容子を見せる。そこは好かつた。

治兵衛は、もう焦れ〳〵して來て、

『サア〳〵〳〵。コレ兄者人。片時も彼奴が面見ともない。もう歸りませう〳〵。……さりながら此の無念口惜しさ。何うもたまらぬ。』と齒ぎしりをして『今生の思ひ出、女が面一つ踏む。御免あれ』と、もう立ち上つて歸り仕度でゐる兄の背後を通り越して、小春の傍に寄つて行き、

『ヱ、〳〵。しなしたり、足掛け三年戀ひし床しも、愛し可愛も、今日といふ今日、只此の一本の暇乞ひ。』と言ひなり、ピタリと小春の頰邊を張り、續けて脾腹を蹴飛ばす。小春はワッと泣きながら、頰を撫で、痛

む脇腹を擦る。此處の處、治兵衛の未練と憎しみとの情が見えてゐる。さうして吾々は一向小春を哀れに思ふ。

四

あまりに閑話が長くなつた。どれ早く『時雨の炬燵』を反復玩味しやう。此處で原作と改作との比較をして見たいが、それも省いて今はその改作――通例『紙屋内の段』と言つてゐる、此度觀たまゝの上に就いて言つて見やう。

舞臺は型の通り、正面上手寄りに店の間、留、當座帳、大福帳などゝ同じく帳簞笥の書き割りの上にハッキリと書き分け、中央に勝手に通る三尺の納簾、その上手の壁に諸國狀さし、地方注文狀さしなど記した狀さしが書きゐる。ズッと上手奥の間に三尺開いた障子を境にして衣類簞笥を見せた好み、下手土間、木戸、外の羽目際に用水を置く。

原作では、幕が明くと直ぐ、女房おさんが内と店との締めくゝりから小供の世話まで氣を使ふ面白さうな世話場になつてゐるが、近松座のは、あの稽古本の前にまだ長たらしい要領を得ぬ仕出しを使ふ。それが甚だ感興を殺ぐ。さうして肝心、兄の孫右衛門とおさんの母親との前で治兵衛が、今は天罰起請文、小春に縁切る、思ひ切る云々といふ誓紙を書く處がその仕出しの仕舞の方になつて、極めて輕々と何時の間にか濟んで了ふ。事件の本末輕重を誤り、つれて筋を運ぶべきアクション

がひどく鮮明を缺くことになる。さうしておさんといふ中心人物が、その愚劣なる仕出しの間、手持ち不沙汰にたゞ坐つてゐなければならぬことになる。それでは演出の冒頭に於て先づ觀る者の心理を魅し置くべきフレッシュな力が鈍る。――その仕出しの如何に愚かなるかは、その筋を說明せねばならぬ。冗漫を恐れて省き、たゞ近松座の當事者に向つて、右の意見を忠告し置く。

時雨の炬燵は、おさんの一人舞臺である。先年歌舞伎座でした時に、故の秀調のおさんが藝としては好評であつたが、惜い哉縹緻が劣かつた。若し今日の極端なる藝術論から言へば、或は美貌は重要なる要素でないことになるかも知れぬ。何となれば『黴』の讀者『家』の讀者はお銀とお雪との容貌如何に大なる價値を置かないで尙ほよく其等の藝術を鑑賞することが出來るから……併し此の『天の網島』の場合に於てはその作品がクラシックであるといふばかりではない、作意から言つてどうしても美貌でなければならぬ。小春でも治兵衞でも近松座の人形は、例へば東京でなら深川座か壽座かに出さうな顏をしてゐたが獨りおさんに至つては何から言つても殆ど理想的の人形であつた。東京の俳優で今日おさんに扮して十分觀客に滿足を與へ得る者を數へて見て殆ど一人をも得ない。羽左衞門の治兵衞なら私は一度見たいと思はぬこともないが、おさんはさて誰れがするであらう。斯ういふとホフマンスタールやメーテルリンクの讀者等は今は最早『天の網島』の時代でない。と言つて反抗す

るであらう。さうなれば私はたゞ苦笑したのみで矢張り吉田小兵吉のおさんが伊達太夫の聲音につれて流す美しい涙を何時までも味つてゐやう。

小春に比べておさんの人形はズット大きく出來てゐる。心持ち平顔の、剃つた眉毛の跡薄青く、それが爲に額が見にくからぬほどに廣く寛かに見える。パッチリとした黒眼勝ち、鼻筋通つて小さく結んだ口元に十分なる愛嬌を湛え、上唇と鼻のまはりに表はれた感じに優しみと悧發とを示してゐる。ビンチのジョコンダが悲哀と微笑と……あらゆるものを表はしてゐるといふことであるが、おさんの蒼いほど白い人形の顔にも悲哀と微笑と聰明とを湛えてゐた。

多い髪を古風な女房髷に結ひ、廣く出した濃い江戸紫の半襟が、白い顔に對してハッキリと浮立つて見える。黒襦子の半襟のかゝつた濃い小豆色に黒の荒い薩摩立縞のお召の着付が、遠くで見てゐる眼には一層くすんで澁く映るのである。

騷々しい仕出しが濟み、孫右衞門と母親とが誓紙を受取つて安心して歸つて行くと、後少しの間舞臺が空になつて、靜寂となる。そこへ、伊達の透き徹る艶麗無類な美音で、

『直に佛なり門送りさへそこ〳〵に治兵衞は傍に有合す……』

と語り出すにつれて、一旦納簾の奥に入つた治兵衞が、靜かに出て來て上手奥の間との境の處に行き、蒲團を取つて被りながら、有合す定木を

枕にして横になる。少し後れておさんまた納簾から現はれる。さうしてその悧發さうな美しい顔で靜かに其處等を一寸見舞はす。すると、また治兵衞が蒲團を被つて寢てゐる樣子を認めて、『まだ曾根崎を忘れずかと』で、そつと其の方に歩み寄つて、膝をつき、

『……涙にしめる……』で、柔かに蒲團の端を持ち上げ、『その風情……』で、些と覗き込んでつく〴〵と夫の顔を見入る。『おさんは呆れ……』で、少しく顔を持ち上げて右の袖で目を拭く。『つく〴〵と顔打守り〳〵』で、ずつと後方に身を退いて、『ェ、あんまりぢやぞへ治兵衞さん……』の科白になり、おさん遂に立つて身振りに怨みを見せる。凡て此の間、緩く滑かに艶を含んだ音樂と一所に人形の動作も殆ど一點一劃の蕪雜もなく、洗練の上にも洗練せられた纖細な線を畫くやうに進んで行く。

『ァ、コレ〳〵、ソリァまあ何をいやるぞいの……』で治兵衞、寢たまま、顔だけ此方に向けて蒲團の中からおさんの方を見ながら口を利く。三味線も淨瑠璃も人形もピッタリ意氣があつて、まるで活きてるやうである。

『イェ〳〵憎いさうな〳〵。憎ましやんすが嘘かいなあァ』の、憎ましやんすが嘘かいなあァと、いひながら、おさん、舞臺の中央の心持ち下手に寄つたところで、胸が迫つて崩折れたやうにすうッと婉やかに腰をこゞめて、帶に挾さんでゐた、熨斗形の白い手拭を取つて、つよく涙を拭ふ。それだけの身振りが如何にも優美なさうして大きな線に描かれた。

水の垂れるやうな風情といふのは斯ういふ場合をいふのだらう。

私の四周の美しい女達、棧敷の髯を生した紳士たちまで、呼吸を殺して見入つてゐたのが、此處の處で一時に、ハット太息を吐いて感歎を洩らした。併かもたゞ『憎ましやんすが、嘘かいなあア』の心持ちを表現した、思ひ餘つて崩折れた身振りに過ぎないのである。もし實人の演劇であつたならば、それだけの科白も仕草も音樂的抒情でなく、たゞの言葉になるから、それほど情が含まぬだらう。同時に人形だから、實人よりも一層明晰にその動作が、極つた線に彫まれるのである。私は觀客の感歎の聲を見聞いて、線の美の人心を感せしむる力も亦た大きい。と思つたのであつた。

それを聞いて治兵衛蒲團を除けて、半身起上り凝乎と此方を見る。『おとゝしの十月……』から、おさんすぐ起き直つて『コレ此處で枕ならべて此の方は、女房の懐には鬼が住むか蛇が住むか』で鮮かに兩手を懐に入れて、それから赤い振口を膝の上に重ねる。『それほど心殘りなら泣かしやんせ〳〵』で、煙草盆を引寄せ『その涙が蜆川へ流れたら……』で、煙管を取り上げ吸ひ付ける。此の時治兵衛は、もう起き出て、舞臺の上手に來て斜に坐つてゐる。『小春が汲んで呑みやらうぞ』と言ひながら、煙草盆を持つて治兵衛の傍に寄つて行き、煙管を靜つと夫に渡す。

治兵衛は煙草を吸ひながら、少し顔を横に向けて默つて、おさんの口

説きを聞いてゐたが、『切ない義理があるとても、二人の子供は、お前何ともないかいなァ』と言ふ處に來て、一寸煙管に凭れて、頰だけ此方に動かして、チラとおさんを見る。『オ、尤ぢや。誤つた。悲しい涙は目より出で、……』で、ポッと煙管をはたいて、顏を上げ、此度はまじ〳〵とおさんを見守る。最初の『門送りさへそこ〳〵に』の治兵衞の出から、此處までは全く觀てゐて呼吸をも吐けぬ甘さである。

それから、小春奴が事は心に殘らぬが、いよ〳〵太兵衞が請出すといふので、自分が金の工面に盡きたからそれゆゑ小春を退いたとか、何とか、知らぬ世間の口齒にかゝるが口惜しい、それで涙を溢した。ぢや小春さんはお前に愛相盡かしをいふて、アノ太兵衞が處へ行く筈かへ、それでは小春さんは生きてゐる氣ぢやない、請出されたら、そのまゝ死にしやしやんすに違ひない。小春さんを殺しては此のさんの義理が立たぬ。どうぞして一刻も早く生命が取り留めたいといふことになり、身の代金百五拾兩の半金の工面をする。此の間は平ひ調子で進んで行く。それから『……小春さんの方は急な事。ソレ其の小判五拾兩と殘りはわしがと、かい立つて、明けて取出す染小袖……』こゝから最後までおさんの悲哀は一歩〳〵絶頂に上る。

おさんは、さういひつゝ立つて奥の間に行き、簞笥の抽斗から女の小袖や子供の着物を一枚〳〵出して來て風呂敷の上に重ねる。その淺紫や緋や鼠の色彩が華やかに眼立つて、悲しい場面にも美しい、意氣な情趣

を添へてよい。さうして『……子供の物もかい集め……』で一旦重ねた着物の端をじつと持ち上げて見、金目を見積りながら『内輪に見ても二拾兩……』で自分の頭から簪を抜取つて、懷紙で一寸拭いて包み、衣類の間に挾む。さうして兩手で着物の上を撫でゝ皺をのし、風呂敷にて包みながら『……身請けしてアノ太兵衞めに一分立てゝ下さんせ。』と言つてさん其の包みの上に、面を伏せて泣く。

此の邊から、私の前後左右で美しい人のすゝり泣く聲が頻りに聞えて來た。

『と言へど、いらへも涙聲。オ、過分なぞや、嬉しいぞや、が手附渡して取留め、請出して圍うて置か内へ入るるにしてからが、マそなたは何と……』

と云ふ治兵衞の言葉を聞きながら、おさん俯伏した顏を包みの上から擡げて考へ迫つてゐたが、稍あつて、『ア、何のいなア必ず案じて下さんすなへ』と言ひながら、また眼を拭き、『ハテモ子供の乳母か、飯焚きか、』でパッと決心した面を上げ『面倒ながら〳〵眞實の妹々〳〵持つたと思ふて、』で、何處を見るともなく正面を向き、涙をすゝり〳〵言つてゐたが、『と、云ふも胸までつッかける涙呑み込み〳〵て』で、溜らなくなつて、スッと起ち上つて奥の間との間の正面の柱の傍に行き手拭の兩端を持つて、眼を抑へて泣きながら、次第にその手拭を下に落して、口に持つて行き、嘲えて聲を呑む。

治兵衛は舞臺の中央でたゞ腕組みをしたまゝ萎れてゐたが感慨極り『ェ、何にも云はぬ……親の罰天の罰佛神の罰は當らずとも、ヤ女房の罰が恐ろしい、赦してたも……』と言つて拜み泣きをする。それを、おさんすつと傍に寄つて來て『ァ、コレ勿體ないわいな〳〵……皆な夫への爲ぢや物』で手拭で治兵衛を打つ眞似をし、また眼を拭き、鼻をすゝつて『後の間では詮ない事。サァ〳〵早ふ』と夫を急がす。さうして三五郎を連れて出やうとする處へ、舅五左衛門が入つて來る。

『……びつくり拍子拔參りの宵に知れたる心地して一間の内へ入にける』と淨瑠璃で語る處を、治兵衛とおさんは、極り惡さうに納簾に近い帳簞笥の前に行つて差向ひ默つて肯き合ひつゝ、おさん始終眼や鼻を拭いて泣いてゐる樣子をする。たゞそれだけの事が非常によく効いて、一方五左衛門の太い聲でいふ小言に反襯して一場の光景印象頗る鮮かである。

それからおさん聞き兼ね『コレとゝ樣ソリヤお前聞えませぬわいな〳〵。こちの内の身代の衰へたのも……』から前に出て來て長い口說きになる。此處は近松の原作には無いことを增訂してあるけれど、好い處だ。此の邊、おさんの涙に最も力があつて滿場盛にすゝり泣く聲がする。『……元も子もないやうにして仕廻はしやんしたぞへ男氣な治兵衛殿、舅の事なり、云ひ出せば此方も恥と證文も殘らず戻し濟さしやんした其時には、コレ此の剛い顏に涙をこぼして悅ばしやんした事をお前よもや

忘れはしやんすまいがの……』で、おさん立ち上つて父親の肩先を捉へ、段々手先の方へ滑らして行つて、その手首を取つて『その恐ひ顔に』と言ひかけて、涙に物が言へなくなり、凝と親の顔を見上げ、暫らく身を顫はして泣く。それから、『又主の惡處通ひも元の發りは……』で、また身を退いて、二人の中程に座つて、正面を向き、手拭を持ちながく強く張りのある泣き科白を言つてゐたが、

『……ほんにやれ〳〵、行かしやる度々にわしや後から拜んでばかりゐたわいな〳〵……』で、治兵衛の傍に寄つて手を捉らぬばかりにして俯向いて泣き詫びる。『その大恩を打忘れ、あほうじやのイヤたはけのと』で、また父の方に來て恨み泣く。『假初にも勿體ない、こちらへて下され、こちの人』で、また治兵衛の方に行き『とゝさん逝で下さんせ』で、また父の方に寄り、おさん一人一生懸命。彼方に行つたり、此方に來たり、なだめつ口説きつする。さうして『なだめつ呵りつ兩方へ我身一つのせつなさ、つらさ思ひやられて道理なる、』で、おさん確と捉へて搖り動かしてゐた父の肩先から、手を放し、溜らなくなつて、此度は納簾の處に驅け寄つて、背を向けて、そのの れんで涙を抑へて認か泣きゐるさま哀れで艶かである。

其處へ『思ひは同じ憂思ひ。身の云譯に、紀の國屋小春はこゝへ來かかりて、樣子ありげな內の體、逢ふてはいかゞと用水の蔭に隱れて聞いたる。』で、小春新地茶屋の場と同じ扮裝で、下手から小走りに入つて來

て、一寸内の樣子を覗ふやうにして、すぐ用水の蔭に身を忍ばす。

それから、五左衞門が、かけふさがるおさんをつき飛して置いて、簞笥の中を改める前後は、改作そのものもまた伊達太夫のみならず、凡ての太夫の此處の語り口は誇張があつて、よくない。たゞ太夫の語るにつれて、五左衞門が仰山に振舞ふてゐる間、おさんと治兵衞とが無言のまま差向つて、涙を拭き〳〵首肯き合つてゐる。その默技そのものが何とも言へず、しんみりとした好い感じを與へる。それは淨瑠璃の力にあらずして人形の力である。

五左衞門がサア〳〵うせうと引立『つるので、おさん『ア、コレとゝさん、マア〳〵待つて下さんせ〳〵ナ、イヤ申し治兵衞さん、モあゝいひ出しては聞かぬとゝさん、わたしやマア歸ります。云ふまではないけれど、勘太郎が事〳〵を賴みますぞへ、朝飯まゝに忘れずと桑山の丸子〳〵呑して下さんせ〳〵ェ』と涙に聲をつまらせながらいふところの伊達太夫の聲音は、夫や子に對する悲しい愛情と、洞察と同情とのない壓制的な粗笨な世間道德の權化たる父の生木を割くやうな所置との間に苦惱して、悲しい運命の前に涙ながらの從順を餘儀なくせられてゐる堪へ難い日本國固有の女性美の情調である。さうして人形淨瑠璃の、實人の演劇に比べて不自由の多いにも拘らず、別に私どもの感興を大ならしむる特點は、普通劇の科白が散文的なるに反し、之れは淨瑠璃を以つて一切人形の科白に代へてあるが故に、例へば單に『憎ましやんすが嘘かいな

あ』と言ふ處にしても、それに複雜な情調の籠つた聲樂を以つてするから、人形そのものゝ立居振舞の既に實人劇以上に情調的なると相待つて、更に一層濃厚なる情調の効果を生ずるのである。

すると治兵衞が『オ、氣使ひ仕やんすな。ァ、思ひも寄らぬ今此の仕儀、とんと心も落着ねど、そんなら暫らく別れてゐよ。舅殿も娘の事。まんざらむごふもさつしやるまい。ッィ戻りやるやうに成ろぞいの。』

『ァイ〳〵、コレ申し治兵衞さん、必ず短氣の出ぬやうに……。』

と優しく言ひながら、涙を切つて、此方に顏を向けたおさんは好かつた。二人の別れ際の此の簡單な哀切なる對話は、それが聲樂によつて豐富なる情を含んでゐるだけに、イブセンやハウプトマンなどに見る夫婦間の葛藤よりも遙かに人間的の意味が深い。

おさんは遂々、父にせき立てられて眼を拭き〳〵後に心を殘して出て行つた。その後影を見送り〳〵小蔭から小春が姿を顯はして、內にかけ入る。それを見て治兵衞が『ヤァそなたは爰へどうして』と訝かる。そして勘太郎が母をたづねて泣くのを、小春馴れぬ手に抱上げて賺かしながら、

『何から云はふぞ治兵衞さん。此の間も曾根崎で愛憎盡しな悲しい別れ……』云々といふ言葉は何ともいへない優しい情けが含まれてゐてよかつた。

あゝ南邊といひ、曾根崎といひ、之れを彼の深川の堀割といひ大川端

といふに比べて、更に〳〵名狀し難い藝術的聯想を強からしめるではないか。

（大正一年十二月十七日）

一月の文樂座

一

大阪に來てゐても、自分は、道頓堀の實人芝居には、まだ一度も入つて見ない。ナニ入らうと思へば譯もないことだ。その癖一日に何度となく浪華座や角座の前を散歩してゐる。つい此の間まで堺の大濱にゐた時分にも殆ど毎日のやうに大阪に來ては、其處等をブラ〳〵してゐた。今度は道頓堀とは眼と鼻の難波新地に轉宿してから、丁度牛込の矢來町にゐて、毎夜幾度となく神樂坂を散歩した私の癖は此の地に來て、毎夜々々南地花柳街と道頓堀の芝居町と心齋橋筋の華やかな商區との散歩に於て以前に變らぬブラ〳〵歩きが繰返されてゐる。

けれども私は依然として道頓堀の實人芝居には入つて見やうとは思はぬ。そんなに故意に入らぬのではないが、唯々入つて見る氣にならぬのである。私は實人芝居ならば、東京に於て之れを見る。雁治郎の菅公が何樣なものか知らぬが、私はもし何うかした氣分のはづみで雁治郎の菅公が見たくなつた場合には、ヂッと故人團十郎の貴族的なる風貌とその朗々たる音聲とを靜かに想像に想ひ起して、觀劇慾を鎭めやうと思ふ。その代りに雁次郎が忠兵衞をするとか、治兵衞をするとかいふことなれば、私は何物を置いても、二度の處は假し三度になつても見に行かうと思ふ。此の地に來てゐる、東京に永住してゐる人で、浪華座に行つたとか、イヤ喜多村を見たとか、高田を見たとか、觀るべき物を全然無選擇

に談じてゐるのを見て、私は、獨り密かに話にならぬと、自分だけで内々お高くとまつてゐるのだ。

芝居の話ではないが、私は、一月の本場處の相撲が見たくつて、見たくつて堪らない。夢魂飛んで兩國の常設館の高い天井裏に彷徨ふてゐる。私はそれくらゐに東京相撲を見たがつてゐる。大阪でも、東京と殆ど同じ日から、矢張り難波新地の近くで相撲が初つてゐる。私の宿の二階から、藝者達の、勸進元に贈つた幟が見えてゐる。それでも私は大阪の相撲は何だか見たくない。

さう言つたやうな、一種の私の頑狹なる趣味性で、私は文樂座と近松座とには隨分度々足を運んでゐる。

過般――もう去年である――十一月の近松座を觀た時に誰れか同好の人に繪端書を上げたいと思つて、近松座の廊下に立つて考へて、私は、中根岸の千葉掬香さんに、近松座の「天の網島」は面白かつた。といふことを書いて送つた。さうしたら果して手應のある端書の返辭があつた、千葉さんは、邦樂の何物を持つて來ても、我が淨瑠璃のやうな情調は味はれない。よし西洋樂を聽いても、淨瑠璃のやうな情調は味はれない。お互に日本人ですねえ。といふやうな情熱のあるハガキであつた。千葉さんも亦た趣味に就いては隨分頑狹な質の、貴族的の江戸ッ兒だ。私とは此方が平民的で田舍者であるだけの違ひである。千葉さんは自分で淨瑠璃を稽古してゐるので、もうなか〳〵上手になられたといふことであ

る。此の千葉さんの親類の銀座の千葉松兵衞さんも浮瑠璃がお好きで、有樂座に呂昇が來た時など、棧敷の株式席に、稽古本を持て坐つてゐられるのを見受けることがある。河野桐谷君の令兄の西村辭三郎氏は、此處に斷るまでもなく紳商故西村勝三さんの令息で前の侍講故西村茂樹先生には甥になる。此の人がまた浮瑠璃黨で、千葉掬香氏と同じやうに自分で稽古をしてゐるのだ。掬香氏にしろ辭三郎氏にしろ、何れも巨萬の財産を擁して遊んで暮してゐる正眞正銘の高等遊民で、私などの下等遊民とは違つてゐる。掬香氏が『三越なんぞは、田舍者の買ひに行く處だ。』と意張つてゐるほどの、着道樂の通人たることは、申すまでもないが、西村辭三郎氏もまた古振り唐棧の袴を着けたりなどしてゐる江戸の通人である。かういふやうにお金があつて、江戸つ兒のチヤキ〳〵で通人で、それで淨瑠璃の好きな人も隨分少くないのである。

先月、京都で、島村抱月氏と話した時、ウイリヤム・アーチヤア氏が、日本の演藝の缺點を無遠慮に攻擊したことに關聯して、抱月氏は、實際日本の歌聲は音樂ぢやない。アーチヤアが牛の唸るやうな聲だと言つたのには無理はない。東儀君なども日本の歌の聲は音樂ではないと言つてゐる……自分はその點にまだ多少疑ひを持つてゐるが、……云々といふ座談をした。島村氏は、流石に日本の傳統的の趣味にも富んでゐる人であるから、無下に且つ淺薄に輕卒に邦樂の歌聲を排しはしない。その點にまだ疑ひを持つてゐる。といふ餘裕を殘しての話であつた。獨りアー

チャーに限らず、在留の西洋人が日本の歌聲を牛の唸るやうに聯想するのは珍らしくないことで、上野の音樂學校などで催しがある時でも長唄などになると西洋人はズン〳〵歸つて行く。抱月氏が疑ひを殘してゐるのは、專門的に日本聲樂の審美的分析をして見なければ十分に決斷を下しかねるといふのであつて、此の點に於ては氏の如き人の遺憾なき研究を待つことにして置いて、私は、たゞ日本の聲樂は面白いと言ひたい。さうして吾々は實人芝居よりも淨瑠璃を聽く方が好きだ。

二

一月の人形淨瑠璃は、近松座は忠臣藏の通しである。文樂座は前狂言が繪本太功記、中が堀川、切が夕霧である。今度は近松座よりも文樂座の方が、氣が進んだので、先づ九日に文樂座の方に行つた。

大阪の淨瑠璃界のことをよく知らぬ自分だが、太功記の「鷺の森」を語つた富太夫といふのは巧みだと思つた。何時も此の太夫には感心する。盲人であるが、好い聲で、併かも浮つかない語り口だ。

「尼ケ崎の段」を攝津大椽が語る。最初の方では、何だかヨイ〳〵のようで、聲がゴロ〳〵言つてゐるようだが、次第に興が乘て來るものと思はれて、段々危なつかしくなくなるばかりでない、動もすれば嗄れ樣とする聲に光澤が生じて、その若々しさ驚くばかりである。聞けば明けて七十八になるのださうな。それで一時三十分の間張り詰めた勢ひを以つ

て語り通すのである。此の人が語つてゐると、あの武士道德一天張の氣丈の老婆の性格が遺憾なく發揮されて、貫目にも申分がない。さうかと思ふと、母みさをはみさをで、その口說きに哀情あり力がある。初菊は初菊でその涙に艶がある。

堀川は越路太夫が語る。前の四條河原の段を源太夫が語る。此處の簡單な一と場もよかつた。一體「近頃河原の達引」は誰れが作つたのか知らぬが、私は最も好む院本の一つである。去年十一月の近松座の「天の網島」の時もさう感じたが、その前の「八陣守護城」を觀聽きした心地から「天の網島」に移ると、遙かに感じが眞實の境地に入つて來る。そこは時代物と世話物との相違から來る結果であるが、作そのものゝ爭はれない相違である。「八陣守護城」のような粗笨な作は、幾許春子太夫のような上手が語つてゐても、例へば、清正が本國にゐて關東の古狸の奸策を見破つた際のセリフ笑ひを、どんなに春子が氣張つて一生懸命に語つても、また三味線が高い調子を張上げても、それが私には歳末の賣出しの大道樂隊の煽動の音ほどにしか感じられないのである。

「守護城」に比べて「太功記」は時代物とは言ひながら、まだ作風がいくらか自然であつて、光秀といふ悲壯なる英雄の情緒も自から同感出來るようになつてゐる。さうして「尼ヶ崎の段」だけ切り放して見ても可なりに纏りが着いてゐる。「守護城」の滅裂なのとは違つてゐる。けれども、これを見聽して、それから「お俊傳兵衛」に移ると、丁度「守護城」

を聞いてゐて、「天の網島」に移つた時と同じやうな感じがする。私の、理由もない唯、單純な好惡から言つても、お俊といふ女は小春よりも梅川よりも好きなやうな氣がする。

で、河原の喧嘩の場の舞臺はよかつた。東京にゐても近來あんまり芝居を見てゐない私である。始終見てゐる人々に取つては珍しくないかも知れぬが、兎に角私にはスイとした好い氣持ちだつた。――さうしてそれを見てゐて、好い感じのした處によつて判斷すると、私は矢張り芝居が好きなのだなァと自から意識した。

舞臺一面の黑幕、その外、少し上手よりに柳の枯木を一本あしらふ。凡て加茂川原の冬の夜景。そこへ傳兵衞の喧嘩の相手たる官左衞門が、墮落した惡侍の風體よろしく茶と黑の荒い辨慶縞の尻を端折つて、骨董仲買勘藏を連れて出て來る。官左衞門に聲をかけられて、駕から出た傳兵衞の樣子も好ましかつた。自分は此の作の丸本を通讀したことがないが、傳兵衞は一寸春雨傘の大口屋曉雨に似た一點がある。作の趣向も脚色の事實もスツカリ違つてゐるが、傳兵衞は勘忍の强い謙遜な堅氣の立派な商人である。かういふ正義な商人と墮落した惡侍とを對照して類型的に何處までも武士の無道を表現して見せた處に德川時代の腐敗を提示する時代精神も見えてゐるのだ。傳兵衞は一圖に寶の茶器が取り戻したさゆゑに幾許打たれても勘忍をする。それにも係らず惡侍は戻さうと言つて懷中から取出した茶器をば擲つて微塵に碎く。もうからなつては

命も同然な茶器であるから、流石の傳兵衞も溫順な商人の腰に差した一本の刀に訴へて存分に無念を晴らさゞるを得ぬ。傳兵衞が、ムヽさうと決心の面持ちして、脇差しを拔くより早く一刀敵に浴びせて置いて、それから捩み合ひになる處がひどくよかつた。傳兵衞の人形を使つた吉田玉治郎、官左衞門を使つた桐竹紋二が意識してゐるのか、どうか知らぬ——洗練に洗練を重ねてある人形淨瑠璃のことだから多分意識してやつてゐるのだらうが、喧嘩が如何にも刀を使ひ馴れぬ商人の喧嘩らしくつてよい。よく實人の芝居でする所謂切り合ひの技術でなくつて、本當の喧嘩らしい。そして喧嘩が始つて一刀浴せると同時に黑幕を切つて落す。舞臺は全景に四條河原を表はして、兩岸の妓樓妓樓の二階座敷の火影、

軒行燈のまたゝき幽かにして、遠見に一體の山を見せ、滿月に近い月が、その空に冴えてゐる。止めを刺してゐると折から清水寺の鐘の聲が靜に響いて夜の深いことを知らする。

「天の網島」の改作では、治兵衞が矢張り戀敵太兵衞を殺すことになつてゐるけれども、それは原作の精神に對して極めて打ち壞しである。それに引き換へ此傳兵衞は最初からローマンチックに出來てゐる。假し作としての文學的優劣が小春治兵衞に比べて何うであらうとも、それはさて置いて傳兵衞の殺人は此の作の原因になつてゐる。それゆゑ殺しの場はなか〳〵肝心である。そしてその殺しの場が前言つたように巧みに人形が使はれて、傳兵衞のローマンチックな境遇に光彩を放つた。

「今鳴つたは清水の鐘……」と言つて、フト自分に返り、斯うしてはゐられぬ身と始めて覺悟をし直して、切腹しやうとする處へ番頭の久八が若旦那を探ねて來る。そして切腹を止めて、この姿ではと、久八の取出す手拭で亂れた髪を隱すべく白手拭の頰被りをする。喧嘩の後の着付けが亂れて、同じ糸織揃ひの羽織と上着に赤い襦袢の裾が表はれて、白い博多の帶の解けかゝつたのは紋切り型ではあるが、その型がよかつた。さうして其白い手拭を右の頰の横丁でひねつてはせた鹽梅は意氣とも何とも言ひやうのないほど、私には氣に入つた。あゝローマンチックの傳兵衞よ

三

堀川の段になつて、越路の淨瑠璃は東京でも一昨年の十二月に帝國劇場で聽いた。何度聽いても好い。さうして芝居で觀ても好い。去年(?)東京の歌舞伎座の仁左衞門の與次郎はよかつたといふことだ。さうだらうと思ふが、私は遂に見なかつた。面白いには面白いが、併し此の堀川の舞臺は必要條件として少しぢゞむさいのが厭だ。寫實にすればさうせねばならぬのでもあるし、そこに言ひしれぬペーソスが生ずるのだけれども何だか舞臺が汚らしい。

近松座の「天の網島」では、小春の人形その物の製作に不服があつたが文樂座のお俊は遙かによかつた。さうして衣裝も注意が屆いてゐた。小春はいかにも安女郎のやうだ——之れはまさか、寫實を狙つて故意にさ

うしたのではあるまい。お俊は小春と同じ階級の女性だから、大體の衣裳は似てゐたが、人形そのものも小春よりは立派でもあるし、その多い島田の髪には大きな紅白の丸くげ――ちんころ掛け――を結んでゐた。それで餘程華やかに見えた。腰にも長い淡紅色のしごきを結んで下げてゐた。

精しく書くときりがないが、私は、此の淨瑠璃で、初めの二上りの唄の處の「……死に行く身の後髪彈く三味線は祇園町、茶屋のやま衆が色酒に亂れて遊ぶ騒ぎ合ひ、あの面白さを……」と言ふ處が何ともいへず好い。文章も賑やかに、さも色酒に亂れて遊び騒いでゐるやうに書けてゐるし、越路の此の處の語り口にも、さながら歡樂そのものゝやうな音が響いてゐた。

それから「サアお俊こちらも爰で往生致そ、アイとお俊が供々に、暫し此の世を假滿團、薄き親子の契りやと、枕に傳ふ露涙、夢の浮世と諦めて更行く鐘も哀れ添ふ。ころしも師走十五夜の月はさゆれど胸の暗、過ぎし別れの云ひかはし、死なば一所と傳兵衞が忍ぶ姿のしよんぼりと、たゞずむ軒は……」こゝが好きだ。如何にもお俊と與次郎の兄妹が薄い滿團に寢てゐる情趣が表はれてゐる。また傳兵衞の戀ひする女を慕ふて、寒い十五夜の月の冴えた小路の軒下にたゞずむ心持ちが味はれるのである。越路の語り具合も、人形の使ひ方もよかつた。

内田魯庵氏は嘗て「お俊傳兵衞」の作は近松ではないだらうかと思つてゐる、と言つてゐたが、兎に角よく出來た作である。さうしてお俊等

親子三人が、貧苦で悲しい境遇にゐながら、いかにも溫かい人情の中に漂うてゐるのが好い感じがする。

夕霧は南部太夫が語る。南部の聲そのものは、私は、越路の聲よりも好む。吉田屋の炬燵の場は、艶麗といはふか情緒纏綿といはふか、紙衣を着たあの伊左衞門が、久し振りに夕霧の無事な顏を見て併かも奥の座敷で他の客に蹴られたり踏まれたりしてゐるのを襖の間から覗いて見て、嫉妬をする心持ちは實に心理的であつて十分同感することが出來る。先年歌舞伎座で梅幸と仁左衞門のを見たが、とても〳〵文樂座の今度に比べて話にならぬ。近松はかういふ人間の部面をも捉へて華やかな處をも見せてくれる。矢張りエライと感心した。（一月十四日夜難波新地の假寓にて）

お俊傳兵衞

お俊傳兵衛の作者を思慕す

（一月の文樂座の續き）

先號で、「堀川」のことを、もつと委しく言ひたいと思つたが、あまり長くなつたから簡單に中絶した。

堀川與次郎宅の場は、型の通り。幕が開くと、いぶせき住居の體よろしく。おつる出て澁團扇で七輪をあふぐ。舞臺が一體灰色の感じのする中におつるの友禪縮緬の着付だけが映えて見える。私は此の住居はも少し小奇麗にしてもいゝと思つた。

『目さへ不自由な暮らしなり』で、おつるは沸した澁茶を汲んで、上手奥の間の障子を明けて持つて行くと、老婆立ち出る。此處から稽古の處は、ズッと仕舞まで何度聞いても飽くことを知らぬ。

『母を大事と油斷なき……』で、與次郎歸つて來る。

徳田秋聲氏も何かで言つてゐた。堀川のやうな情緒の劇を求めて、それがしんみりと觀たいと。

前號でも言つたことだが、『堀川』は本當に好きな作だ。從來、主として唯、作品そのものゝ演技のみを印象的に鑑賞してゐて、誰れがその作者であるかなどゝいふ考證家じみた研究を避けてゐた私であるけれど、此の『堀川』の作者は切に知りたい。前號で、内田魯庵氏が、私に、あれは近

松の作ではないかと思ふと、語られたことを誌して置いたが、此處に重ねて作者を知りたがつてゐる私の情熱を繰り返へして世の博識の教へを待つ。さうして、その眞の作者の何人なるかを知り得た場合に、私は、遠き以前の日本に、斯ういふ好い心持ちのする藝術を殘して行つた才人のあつたことを想うて、その人に、無限の私淑の意を表したいと思ふ。

與次郎は、たゞ丸い白の紋のついた鼠色の木綿の上に、袖無しのチャン〳〵を着てゐた。幾十百種と數知れぬ多くの脚本の中に、此の與次郎ほど好人物の性格を代表的に表はしてゐるものがあらうか。

『……母を大事と油斷なき身過ぎも輕き小風呂敷、肩に乘せたる猿廻し、戻りは、いつも日暮れ前。與次郎は息せき門口から、母者人、今戻つたぞや。オヽ、兄戻りやつたか。嘸ぞひもじかろ茶も湧いてある。膳もそこに仕て置いた。オヽ、德よ、今戻つたかよ。今朝から子猿めが親を尋ねてやかましい。ソレちやつと傍へやつてやりや。アイ〳〵そうでごんしよとも。それちやつと乳を呑ましてやりをれやい。』

前號でも、此の作は、お俊等親子三人が、貧苦の中に悲しい境遇にゐながら、温かい人情に漂ふてゐるのが、何ともいへないいヽ心地がする。と言つたが、母親や與次郎の慈愛は動物にまで及んでゐるのが此處の文章を見ても分るのである。淨瑠璃や演劇を觀聽きすることを不德かなんかのやうに誤り心得てゐた一種の偏狹な通俗道德の氣質は近來段々打開

されて來たやうであるが、此のお俊傳兵衛などは、少し極端に言へば、女學校の教科書にしても、いゝくらゐの淨瑠璃である。

世上には、昔しの主從の時代の遠く過去つた今日でも、尙ほ召し使ひの男女の奉公人を過酷に使役したり、犬馬の畜類を無殘に虐待したりする富裕の家庭もあるのだ。然るに『堀川』のいぶせき賤の住家では、その日の煙も立て兼ねてゐながら猿を遇すること宛ながら同胞のやうに取扱つてゐるのである。

一體、德川時代の淨瑠璃や芝居は、その發達の徑路や、脚色そのものに、平民的な處の勝つてゐるなどから、それを愛好することをば、一部の人士の間には下品のやうに不德のやうに考へ慣れて來たのであつたが、本來淨瑠璃には德川武士道を通俗に碎いて、平民の頭にも納得出來易いやうに書かれてゐるものがよほど多い。忠臣藏を初め、その他の時代物は申すに及ばず、野崎村とか此のお俊傳兵衛とか三勝半七とかいふ比ひの世話物に表はされてゐる女は皆な貞女節婦である。貝原益軒の女大學に含まれたる思想を具象化した女性である。古來日本の婦德として要求する註文通りの女性である。以つて德川時代の平民作者が、また如何に當時の道德思想の埒外に逸出することが出來なかつたかゞ分るのである。それを逸出したのは獨り西鶴のみである。

それにも係らず、今日尙ほ一種の頑固な女子教育家などの間に、演劇を觀ることを不德か何ぞのやうに心得てゐる人があるとすれば、それは

偶々以て自家の度し難き蒙昧なる趣味性を詭辯を以て言ひまへしやうとする憐れむべき根性と言はねばならぬ。

芝居で觀れば尙ほ更らの事。文章の上で見たゞけでも與次郎の境遇と扮裝と性格と、あゝ何といふ小意氣な、洒落な、臆病な、哀れな、優しい人間であらう。

さうして私の、此の作で、爾餘の之れに類する作に比べて、更に特種の情味を感ずる處は、それが、お俊といふ遊び女の實家を描き出してゐる點である。近松の『天の網島』には小春の親元のことを記して、唯『私一人を頼みの母樣。南邊に賃仕事して裏家住み……』としてあるばかりである。また『冥途の飛脚』には梅川の親元の事を、唯、

『……私が母は京の六條。定めし此の間詮議に人が往きつらん。日比が眩暈持なれば、何うならんした事やら……。』

とあるばかりだ。その他近松の夕霧を初め、他の作者の作にも遊女は數多く書かれてゐるが、その親元の家を書いたのは珍らしい。堀川の與次郎や母親のやうな親切で實直な親元は斯ういふ遊女の親元にしては稀らしい。けれども事實かういふ親兄弟も世間にも絶無とは言へない。兎に角稀らしいから、私はそれを一層懷かしむのである。

懷かしいと思ひながら、その懷かしい物の本體の解らぬ間ほど一入懷かしく頼りないことはない。ローマンチック・ムードの起原も其處にある。

母親と與次郎とが娘や妹の身の上を案じてゐる物語りには何ともいへない優しい人情が溢れてゐて、實に好い氣持ちがする。さうして與次郎が、

『ドレ灯を燈そと……』と言ひながら、棚の隅から、こそ〳〵行燈を取出して、火を點し、それから、暖簾越しに、奥の間に向いて、

『お俊〳〵、ヤコレお俊』と呼ぶと、お俊は、

『アイ。』

『と、返事もしほ〳〵と、思ひなやみし顔形』の通りに物靜かに立出る、その姿は前號に一寸言つたが、更めて委しく言ふと、薄い鼠色の紋付、裾が石竹か何かの染模樣、派手な赤いシッポウつなぎか何かの下着。紅白二重の襦袢の襟を思ひ切つて拔えもんにしてゐる。頭髪の飾りから着物の着付全體が近松座の小春よりは、水際立つて鮮かであつた。

兄に、傳兵衛が喧嘩の果て人殺しをした一件始終を話し聞かされ、

『その夜の起りも皆わし故、どこにどうしてござるやら、心元なさ逢たさも、いふに云はれぬ此の場の品……』淨瑠璃の女には珍らしからぬ心持ちではあるが語るのを聞いてゐて、好い感じがするのである。それから娘可愛さの母親氣質は、曲の進むに連れていよ〳〵哀切に表はされる。

『母は一途に娘の可愛さ……』から母親の優しい口説きはズッと可い。

『……世間に、たんと有る格な心中やなどしてくれたら、此の母は目かいは見えず、兄はアレあのやうな臆病者、若しもの事が有つたらば、後

で母はどうせうぞ、袖ごひ物貰ひにあるいても、そりやもう一つも厭やせぬけれど、そなたの體に凶事でも有つたら、おりや、もう直きに死んで仕舞ふぞや……。』

かういふ母親の慈悲心は、まだ經驗のない、母親の心に對して洞察のない者は、或はその眞實の感に觸れることが出來ないかも知れぬが、併し此の母親の心は本當である。自分は袖乞ひ物貰ひをして人の門に立つても厭はぬけれどそれよりも、まだ一人の娘の身の無事であることが望ましい。世の母親にはさうでない者もある。けれども、お俊の母親のやうなのも絶無ではないのである。繰返していふ如く、此の『堀川』の陋屋の中には、物堅い貴い義理と優しく温かい人情とが、丁度砂の中の金のやうに輝いてゐるのである。

お前の身に凶事でもあつたら、おりや直きに死で了うぞや。言葉は平俗であるが、そこに名狀し難い母親氣質の眞實が充實してゐるのだ。

臆病で正直な母親と與次郎とが、傳兵衛が、どういふ理由で喧嘩をし、果てはその敵手を殺したかといふことを知らずして、娘や妹の身を大事と思ふまゝ、唯一途に傳兵衛を恐れる心持ちもよく出てゐる。

前にも言つたやうに、德川時代の平民文學者――淨瑠璃作者等は、遊女をまで道德ある者たらしめてゐる。近松の梅川、小春、夕霧、今此のお俊、悉くさうである。乍併私は是等の道德ある女性をば、どうしても全然架空の作爲とは信じないのである。『併し勤の習ひにて、人の落目

を見捨てるを、里の恥辱とするわいな。』これが遊女の心意氣であり、道徳である。これだけの文辭にも、私は、言ひ知れぬ懷古の情をそゝられるのである。

小春治兵衞では、治兵衞の實兄が、いろ〳〵にして二人の中を手を切らせやうとする。また治兵衞が到底小春と切れさうにないので、女房おさんの父親五左衞門は、飽きも飽かれもせぬ夫婦の中を無理やりに割いて了ふ。其等の所置には、いづれも第三者の立場として洞察の乏しいのは勿論であるが、唯叱つたり怒鳴つたりするばかりで人情の優しみが缺けてゐる。然るに此のお俊の場合には母と兄とが、傳兵衞と手を切るやうに勸めるにも言葉に優しい心持ちが含んでゐる。

お俊が袖で眼を拭き〳〵のべ紙に文を書いてゐる樣子は、よかつた。書くのに大分手間を取るので、先刻から、與次郎は氣樂さうに這ひ伏つて二本の脚を膝から下折つて上へ持ち上げたりしてゐたが、例の頓狂な聲で、

『コレイノ、コレ。其のやうに長たらしう書かずとも、ツイどきますと書いても濟みそうな事ぢや。』

と言つて、見物を笑はす。最初の母親を慰めて安心さする處の道化たあの科白も面白い。與次郎は徹頭徹尾道化た氣の好いさうして淡白な樂天家に出來てゐる。多くの觀者讀者は此の『堀川』があまりに眼耳に馴れ過ぎて、それに對する感歎を自覺せずに過ぎてゐるけれど、一度び與

次郎といふ人物に思ひを及ぼすと、實に、此を作つた作者の人と爲りの忍ばれる性格である。假ひそれが自然を遠ざかつてゐるとしても、斯ういふ性格を書かうと思ひ付いたのが面白いし、またそれが全然自然を遠ざかつてゐるとばかりは言へないのである。

それから、傳兵衞が、師走十五夜の月の冴えた、何も斯も凍て付くやうな寒い晩に、浮世を忍ぶお尋ね者の、前後に心を配りながら戀ひする女の親元を慕ふて、しよんぼりと戸口に忍び寄るといふ、その事が詩的である。

『傳兵衞が忍ぶ姿の、しよんぼりと、佇ずむ軒は目覺えの……。』

と、之れだけの文辭が既に私には言ひ知れぬ情緒をそゝるのである。

昔時の作者は、臆面もなく思ひ切つた剽竊や模倣をしてゐるが、此の作も、模倣として了へばそれまでゞあるが、私は此處の處の、傳兵衞の、『慥かに爰と門の戸へさはる相圖の咳拂ひ』から後の文章の、餘りに近松の「天の網島」に似てゐる點のあるのを、その手法といふ跡から辿つて行つて、或は此の作も亦た近松ではないかと想像するのである。一體近松は、治兵衞、忠兵衞、與兵衞、半兵衞といふやうに兵衞の字の人名を好んで用ゐてゐる。傳兵衞がまたその通りである。さうして『天の網島』の下の卷に、

『……兎ても覺悟を極めしうへ、小春や待たんと、大和屋の、潛りの透き間さし覗けば、内にちらつく人蔭は、小春ぢやないか。待つとしらせ

の合ひ圖の咳。ェヘン〳〵かッち〳〵。ェヘンに柏子木打ちませて、上の町から番太郎がくる〳〵たぐる風の夜は、せき〳〵廻る火用心。「よござよござ〳〵」も人忍ぶ、我には辛き葛城の、神隱れして遣り過ごし、透きを窺ひ立ち寄れば、潛り内から密と明く。「小春か。」「待ッてか治兵衞さま早う出たい。」と氣を急けば、せくほど廻る車戸の、明くるを人や聞き付けんと、しやくつて明くれば、しやくつて響き、耳に轟く胸の中。治兵衞が外から手を添へても、心震ひに手先も震ひ……。』

とある。文章は、坪内逍遙氏がずつと以前に、破格の名文として推賞されて、その事は、「文學そのをり〳〵」にも收めてあるが、此の文辭が、「堀川」の前の、

『慥かに爰と門の戸へさはる相圖の咳拂ひ、聞くにお俊が飛立つ思ひ、上げる枕も打ち外す。與次郎は傍に高鼾き、心も供に行燈の灯吹消し差足に、心せく程明け兼ねる戸口の閂、表にもお俊ぢやないか、傳兵衞さま、よう逢ひに來て下さんした……。』

の文章と殆ど異曲同工であるのを思へば内田魯庵氏が、『堀川』を以つて矢張り近松だらうと思はれたのも、全然證據がないとは言はれないのである。

それから曲の進むに連れて、何とも言へないパセチック・ユーモアの興味はいよ〳〵加はつて來るのである。

（大正二年二月十一日）

愛讀の書日本外史

愛讀の書日本外史

時勢は今盛に推移してゐる。嘗て青年讀書子の絶好の伴侶として、彼等に新らしき思想を植ゑ附け、彼等に自己の行くべき道を啓示した頼山陽の日本外史も、大正の青年子弟とは、その思想感情の距離が次第に遠ざかつて行くのは、雑多の理由によつて止むを得ぬ勢ひと言はねばならぬ。

かつて仲小路遞信次官の「頼山陽の日本政記」に就いて、趣味深き演説筆記を見たが、それは同氏が第一高等學校と京華中學の生徒の爲に演説したものであつた。中に、故の伊藤博文公が、青年時代に日本政記を愛讀してゐて、常に懐中から書を離さなかつた。その書には公手記の、山陽の作つた愛誦の詩が記してあつて、其の手擦れのした政記は今は芳川顯正伯の所藏となつてゐるといふ話しであつた。

思ふに維新の當初にあつて、最も深く最も好く頼山陽の日本外史や、日本政記によつて感化されたる青年は、また最も好く時代に働き掛くることの出來る有爲の青年であつた。

然るに今日の青年の思想と生活とは、日本外史とは殆ど全く關係のないやうなものとなつてゐる。私自身は明治九年に生れてゐる。明治九年は西南戰爭の戰雲の漲つてゐた時代であつて、伊藤公などが日本外史の

精神に感奮して爲し遂げた事業は既に成就した後であつた。日本外史は王政復古を起した思想上の動力であつた。それ故私の生れた時代は、若しその意味に於てのみいふならば、日本外史の中心の主張は其の機能を終つてゐたのである。

けれども閭里の風習として、まだ明治二十年代は、少年子弟に頼山陽の日本外史を讀ますことは行はれてゐた。私は少年時代に於て、家庭の讀み物として鄕先生に就いて日本外史を敎授せられたことを一つの罪なき誇と信じてゐる。私は少年時代に日本外史を愛誦した點に於て、幕末の熱情的史論家山陽先生の思想の流行した時代に一歩を蹈みかけてゐたことを床しく思ふのである。

前に言つた如く、社會及び政治組織を批評する日本外史の機能は了つた。それと一つは、印刷及び出版等文運の進歩に連れて、少年の讀むべき書類が無數に多くなつた。また第三には初等及び中等敎育に於ける漢文の敎授が頽れて來た。之れも文明發展の勢ひにつれて亦た止むを得ぬことである。今一度繰返して言へば、日本外史はその中心の主張が機能を了つてゐる。漢文敎育が頽れて、且つ少年子弟が雜讀すべき他の書類が增加して來たこと。此等の原因は遂に日本外史と今日の青年とを離隔せしめた原因である。

然らば日本外史は今後遂に青年の愛讀の書たるに適しないであらうか。否々、私は斷じて否と言はねばならぬ。日本外史は歴史であるとい

ふよりも、寧ろ傳奇小説（ローマンチック、ノベル）である。英雄傳である。勇俠譚である。純傑にして激越なる感情を有する史詩である。

文明が進歩して、驚くべき發明が行はれ、機械の力盛にして遂に人間をも機械化して來た。複雜なる性格を備へ、奇趣變化極りなき天禀の精靈を有つてゐる筈の人間が、單に無味なる事務の道具となつた。

人間生活の意義は遂にそれに留るであらうか。決してさうではない。人間の生存の極致は感興である。人間は最も高調なる感情に生活する者にして、初めて生存の意義を全ふしたものと言はねばならぬ。

自分が日本外史を愛讀する所以のものは、其の中に我が日本人中にあつて最も高調なる感情生活に生活した彈力に富む人間が充滿してゐるからである。死生固より命あり。吾等は徒らに壽を貪ぼることのみを考へてはならぬ。古の武士時代は固よりさうであつた。生命の尊きことを知つた今日と雖も、必ずしもさうでないとは言へない。

兎にも角にも日本外史には、肉體を擲つて高調なる感情生活をした悲劇的人間が多い。自分は外史の中に描かれた事實よりも、議論よりも、その高尚なる史的の感情に依つて全く魅せられたのであつた。

日本外史は源平氏の鬪爭から筆を起してゐる。私は、少年時代にあつて唯何故か平氏を憎んで源氏に同情を寄せた。保元の爲義、爲朝、平治の義朝、義平何れも吾が哀感の情を起さしめぬはなかつたが、分けても私を喜ばしたものは、治承の亂に於ける以仁王の令旨であつた。源三位

頼政の戰死であつた。勇俠にして輕捷なる渡邊競の武者振であつた。治承四年源頼政が以仁王に勸めて、始めて平氏討伐の兵を擧げた時のことであつた。外史には次のやうに誌してゐる。

頼政焚二其第一。率二仲綱兼綱等五十餘人一。追赴二王所一。其舊臣渡邊競。居二平氏第後一。衆欲下呼レ之與偕上。頼政曰。母二以爲一也。彼不レ呼而來者己。而宗盛聞二頼政奔一。使二人闚レ競。在焉。乃召見レ之。問曰。三位逝矣。汝何以不レ從。競佯答曰。臣近與二三位一有レ隙。故不二相聞知一也。宗盛誘以二厚祿一。競佯喜。從レ之。因言。新圖二報效一。獨患レ無レ馬。宗盛與以二所レ愛駿馬一。競乃歸レ舍。結束騎二其馬一。過二平氏門一。呼曰。渡邊競。源家舊臣。何能改レ慮仕二仇敵一哉。今將三赴二援三位一。何不二要擊一。平氏莫二敢出者一。

此の、競が、宗盛から貰つた馬は、もと頼政の子仲綱の愛馬であつたのを、事によつて宗盛に取られてゐたのである。それを今競が言に託して甘く取戻して來た。

けれども此の時の戰は、時運いまだ來り會せず、あはれ頼政は七十七歳の老軀を提げて、平氏の暴横を制すべく最初の犧牲となつて、遂に宇治に戰死した。

頼政中二流矢一。傷レ膝。兼綱亦戰死。頼政乃與レ王訣。使二王脫走一。而自還戰。亂射。敵不二敢迫一。乃入レ院。釋レ鎧而坐。謂二其騎一曰。吾年七十七矣。爲二天下一倡レ義可二以死一也。

由來衽席の上に死なないといふのが、古の日本男子の理想であつた。

吾年七十七矣。爲二天下一倡レ義可二以死一也。と言つて、靜に鎧を釋いて、皺腹に我れと吾が刄を當てゝ自殺したのが面白いではないか。彼れは安心を貪て徒に死ななかつた。意氣の爲に死んだ。渡邊競等も共に戰死した。彼等は感情の高調に際しては生命を鴻毛よりも輕じて敢て悔ひなかつた。彼等は平氏の暴橫を討伐せんが爲に陳吳となつて死んだけれども、その風を望んで源氏の味方は所在に蜂起した。伊豆の賴朝、木曾の義仲、奥州の義經はいふに及ばず、甲斐源氏、近江源氏と、彼方の峽、此方の谷から二騎三騎と、舊恩を想ふて鎌倉に馳せ上つた東國の武士は悉く己の急に赴くものゝ如く思つて私は感謝した。讀んで義經が佐藤嗣信等の二十騎を從へて兄の軍と黃瀨川に會した一條、

引レ兵還。次レ于二黃瀨河一。會下有二一將一率二二十騎一來上。因二土肥實平一。求レ見二賴朝一。賴朝問レ狀。對曰。其年齒二十左右。面目俊邁。曰。是陸奥九郎也。丞呼入。實平導入レ幕。果義經也。曰。聞二阿兄起一レ義。喜不二自禁一。因辭二秀衡一而來。賴朝大喜曰。八幡公之東征也。遇二新羅公來援一。曰。猶見二故將軍一也。今吾遇レ汝。猶レ見二頭公一也。兄弟相對涕泣。

と言つて喜んだ所。外史の一の卷以來憎い〳〵平氏に抑へ付けられた感情が一時に發憤してホロ〳〵と私は覺えず熱い涙を溢した。楠氏の事は今更言ふまでもない。私は此處に楠氏が忠義の爲に死んだといふ、小學敎育の形式を繰返さうとするのではない。唯彼れが信念の爲には生命を惜まなかつたのを讃美するのである。社會や政治の組織は今後如何に

變遷しても、正成が信念の爲に從容自若として死んだといふ一事が、今日尙ほ吾人をして感奮せしむるに足るのである。外史には其の死際が簡潔に描かれて、風誦するに適してゐる。

正成顧謂二正季一曰。我腹背受レ敵。不レ可レ遁也。先破二前者一。而後接二背者一。如何。正季曰然。於レ是兄弟並突入二陸軍一。七離七遭。欲レ獲二直義一。直義馬傷而墜。我兵垂レ及。有二一敵將一。遮鬪而逸レ之。尊氏亦分レ兵來援。包二我軍後一。正成兄弟回レ馬當レ之。血戰十六合。盡亡二其騎一。所レ餘七十三騎。猶可二以潰レ圍。而正成心不レ欲レ生。乃走入二湊川北民舍一。坐釋レ鎧。身被二十一創一。顧謂二正季一曰。死而何爲。曰。願七生二人間一。以殺二國賊一。正成欣然曰。是獲二吾心一。耦刺而死。正成年四十三。宗族十六人。從士五十餘人。

悉死レ之。菊池武重在二義貞軍一。使二弟武朝來一視湊川戰狀一。會二正成且レ死。不レ忍レ去。亦死レ之。

菊池武朝の自死の如きもまた全く意氣の死と言はねばならぬ。

死は、その情狀によつて、常に人間の個性を飾る。死にして免るべからざるものとせば、吾人は、死によつて如何に吾が生活を飾るべきかを考へねばならぬ。併もそは飾らんが爲に飾るにあらず、高調なる感情生活が偶々持來らす自然の結果である。さうして是等の武人の忠死と治兵衞小春の如き情死とその動機と形式とに於て非常に相違してゐるかの如く見えてゐるが、その至誠の感情の徹底して其處に到着した點に於ては二つながら相同じいと言はねばならぬ。山陽の如き近松の如き、その藝

術的感情によつて、一つの高められたる世界を作つて見せてゐる。

新らしき人西行

新らしき人西行

一

自分は、西行の歌を好んで諷誦する。古來日本の文學者の中で西行ほど自然に溺れ、自然を愛し、自然を悲んだ詩人があるであらうか。西行ほど幽遠な人生觀に到着した文學者があつたらうか。西行の前身は佐藤憲淸といふ北面武士であつた。それが二十五歳の頃一朝頓悟して、俗を棄てゝ山林に入り八十餘歳を以て身を終るまで山水に憧がれ、人生を思ひ、諷誦を事とした。

佛敎傳來以後の日本の古代の歷史には、宮廷の貴人、または上流士人の間に落飾して遁世するといふことが頻々として行はれた。西行もその一人であつたらうが、山家集一卷の語る處によれば、西行はその頓悟脫俗の精神に於ても、その佛敎思想を體達してゐた點に於ても日本の思想上に於て稀に見るほど深い處まで入つてゐた人であると思ふ。

日本に渡來した印度思想が日本民族を感化して、日本人によつて咀嚼された佛敎思想となつて詩歌に讀まれたもので西行ほど渾成されたものはあるまいと思ふ。

德川時代の日本は儒敎に感化された功利主義の哲學が興隆した。吾等

は此の德川時代の功利主義の哲學を日本の近世文明史上に於て頗る意味あることゝ思ふ。乍併上世奈良朝を中心として佛教思想の流布してゐた時分程ローマンチックな時代があつたらうか。美しき憧憬と深遠なる厭世哲學と、慈悲深き人生觀とに支配せられた聖武皇后の時代よ。それより藤原氏の華美なるハイカラ時代を經て外來の思想は漸くに日本民族固有の心に渾和した。西行は、日本人に依て日本化せられた佛教的厭世思想の詩人であつた。

吾等は英國の文學史を讀んで田園詩人バーンスを知つた。自然詩人ウィヅウォスを知つた。さうして西行を熟讀することを怠つた。日本には西行の如く田園を樂しみ、自然を愛した詩があるではないか。

二

輓近西洋の文藝詩歌を言ふものよ。卿等は暫らく泰西の詩人の糟粕を嘗むることを休めて、吾が西行を味へよ。西行は世俗を遁れたけれども遂に世俗を忘れることが出來なかつた。彼は閑寂を樂んだ。けれども閑寂を寂しがることを禁じ得なかつた。

新らしき文學者よ。卿等は、イブセンのノラが夫を棄て兒を殘して家を去ることを以て新らしき革命的意義ありといふ。乍併吾等は、吾が西行が妻子を棄てゝ山林に隱れたることの遙かに幽遠なるを思ふ。ノラの出家が新らしき藝術の詩題たるべくんば西行の出家は尙ほ偉大なる藝術

の好詩題たらずや。吾等は、吾等の西行の出家の、ノラよりも更に全人生の上に於て徹底せることを思ふ。ノラは夫の愛の虚僞の愛に過ぎざりしを覺つて更に眞實の愛を欲した。西行は、斯の如き局部の人生に拘泥せずして凡ての人生を放棄し、而して更に凡ての人生を愛惜した。自分は、靜に、一朝西行が出家を思ひ立ちたる北面の武士佐藤憲清の家庭に忍び、それを一場の舞臺の上に髣髴して、ノラが出家を思ひ立ちたるヘルマーの家庭の光景と比べて、其の演劇の興味に脫俗の趣き深きを誇らんとする。彼れは最も高潮なる感情を最も强烈に實行したるものではあるまいか。

三

西行の歌の、詩趣が清高にして秀拔なのは、今更ら言ふまでもないが、何よりも今日の吾等の趣味に合つてゐるのは、歌詞の使ひ方が自然で素樸であるが爲に、技巧の勝ち過ぎた言葉使ひの爲に內容の思想を明瞭に言ひ表はすことが妨げられてゐないといふ一事である。私は和歌には全く素人であるが、素人が日本の和歌に對する要求は、平安朝の詩人才子が歌つたやうな技巧の勝つた、當時の交際社會の樂屋落ちを歌つたものでなくて、直ちに自然人生に打突つて、詩人が本然の感懷を流露した點に存する。事實平安朝の佳人才子等が歌つたものには、當時の交際社會

の内情に通じてゐなければ、その歌の意味を一通りに解しても、その上に成程と興味を感ずることの出來ないものが多い。然るに西行の歌にはこんなのは比較的に少い。これといふのも、詩人が浮華なる都會を棄てて、孤獨自在、行かんと欲する處に行き、感せんと欲するものを感じ、歌はんと欲するものを歌つたからである。

西行は俗世を棄てゝ山林に入つたけれども人の世の戀の情といふものを知つてゐた。彼は戀をも詩にした點に於ては、彼の生存した武士時代の一つ先の時代たる平安朝の詩人と異らなかつた。が、彼の詩は、前にも言つた通りに、廻りくどい言葉使ひで巧みに戯れ言ひ做すといふ弊が少い。戀の哀れをも歡みをも感ずれば、この感じたまゝを率直に流露してゐる。平安朝の詩人の多くが歌つたやうに、ある特別の場合の戀人同志の入組んだ關係を歌問答にして喜んでゐるのでないから時世を超越してゐる處がある。これ故に今日の吾等が讀んでも尙ほ清新なる興味を感ずることが出來る。

四

葉がくれにちり止まれる花のみぞ
しのびし人にあふこゝちする

世の中は、何を見ても興味がない。人は多勢ゐる。けれども誰と逢つて話をして見ん樂みとても無い。花は散つて了つて、見る限り皆な青葉

となつた。互に心と心とを打明けて許し合つた男女でなければ、逢つて見ても唯路傍の人に接する感じしかせぬ。この公けに明らさまに普通に談笑してゐる多勢の用事も興味もない人の中で、誰知らず一人私かに忍んで逢引をする戀人がある。恰も落ち散つて青葉ばかりの世界となつてゐる處で葉蔭に隠れて花片が散り止まつてゐる、その花片を見るやうに、興もない世間の蔭に隠れて一人戀人に逢ふ樂しい心地を歌つてゐる。

ともすれば月すむ空にあくがるゝ
心のはてをしるよしもがな

私は最も此の歌を好む。漂渺たる哲學があるではないか。眞にローマンチックな感情である。理由もなく自分の心は、唯その遣り場に迷つてゐる。さうして動もすれば、あの月の冴かに澄んでゐる大空に憧れてつひ餘念もなく眺め入ることがある。此の理由もなく憧れて迷ふてゐる心の果ては何處を求めてゐて落着かうとしてゐるのであらう。それが知りたいといふので、矢張り戀を歌つてゐるのであらうが、自分はこれを單に戀歌とのみ見たくない。

西行は人の世の戀の感情を懷かしみ哀れんだ。亦次の樣な歌がある。

つくづくと物をおもふに打そへて折あはれなる鐘の音かな
はらはらと落つる涙ぞあはれなるたまらず物の悲しかるべし
木枯に木の葉のおつる山里はなみださへこそもろくなりけり
またれつる入相の鐘のおとすなり明日もやあらば聞かんとすらん

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕ぐれ

西行が、木枯の風の音、入相の鐘の響、秋の夕ぐれの寂びたる光景に、人の世の寂しみを感觸せられて歌つた詩は珍らしくない。西行の思想が寂しみを以つて成つてゐたのは今更ら述べる必要はない。彼は此の點に於て後世の俳人芭蕉と近い日本の最も大なる詩人であつた。

彼は人間の造れる都を去り、雲水に托して神の造れる自然を求めて遠く諸方に行脚した。けれども時々その遠くの都の空を思ひ起して、戀しい想ひに漂泊の旅の寂しさを感ぜずにはゐられなかつた。

秋はくれきみは都にのぼりなば寂しかるべき旅の空かな

近江路や野ぢの旅人いそがなん野州がはらとて遠からぬかは

此の後の詩は、多分西行自身ならぬ近江路の旅人の暮れ近き寂しさを歌つたものであらう。今近江の國の野州（やす）の原（はら）を急いで行く旅人がある。暮れ早い秋の日のことであるから、假へ野州が原のやうなさまで遠くない野路とても、うつかりとしてはゐられない、急いで行かねば途中で暮れて了ふといふのである。唯それだけではあるが、野路の行人の寂寥の感が表はれてゐる。

五

近來屢々文學批評の上で、自覺といひ、反省といひ、自意識といふ。さうして此の自覺とか、反省とか、自意識とかは近世思想の特質である

かのやうに云はれる。けれども自分は、必しもさうばかりとは思はぬのである。古來人生批評の上で、印度の釋迦ほど偉い人があつたであらうか。また佛敎ほど人生を批評して深い厭世觀を極めたものがあつたであらうか。私は、西行の脫俗超世の思想を考へて、日本には既に今日を去る七百年の昔日に在つて斯の如き人生批評の文學が發生したかと思つて驚喜の感に堪へないのである。彼には次のやうな詩がある。

いつの世にながき眠のゆめさめて
おどろく事のあらんとすらん

自分は斯くして、唯ウカ〳〵と活きてゐる。昨日と過ぎ、今日と暮らして活きてゐる。人間は生きるといふ習慣に馴染んで、此の生活の不思議といふことには嘗て思ひ及ぼさない。が、考へて見れば此の世は實に長夜の夢を夢みてゐるやうなものである。今は斯うしてゐるが、何時になつたならば此のながき眠の夢が覺めて、飜然として驚異の念を以つて此の人生を歷々と自覺し得ることであらう。吾等は餘りに生活の因習に慣れてゐて人生を面と面反省するの心が足りない。といふ精神である。

私は、此の詩の中で、「おどろく」といふ語句に最も斬新な興味を持つのである。國木田獨歩の『牛肉と馬鈴薯』の中に、岡本をして自分の願ひといふのは、

『喫驚したいといふのが僕の願なんです』と言はしめてゐる。

A wake, poor troubled, shake off thy torpid night-mare dream.

目覺めよ。憐れなる昏睡者よ。汝の痲痺せる惡夢を振り去れよ。

ダーキンが進化説を發明したやうに常に驚嘆の心的狀態で居りたいといふのが國木田獨歩の常に口にすることであつたのは氏の作品に散見する思想である。尤も獨歩のは現實生活の無聊に倦んで、唯眼の醒めるやうな出來事を望んだといふまでの感じもある。西行のは、現實世界の夢幻の如きを覺りたいと願ふ心である。それを驚異の心持で味ひたいといふのである。西行の如く意思强く恩愛のきづなを斷つて、妻子を棄て、發心遁世した人々は斯の如き驚異頓悟の因緣がなければならぬ。私は、吾が邦の上世思想史を思ふて、日本民族であることに鮮からぬ興味を持つ。

世の中をゆめと見る〳〵はかなくも猶おどろかぬ我がこゝろかな

此の詩は前に引いた詩と同じ意味のことを歌つたものである。此の世の中は夢だ。が、さてその夢だとは知つてゐながらも、果敢なき今日明日と過して、まだ廓如として悟り切ることが出來ぬ。何といふ愚かな吾が心であらう。といふ意がある。

由來詩人は涙に富んでゐるとは言ひながら、法師がまた最も涙に富んだ詩人であることは言ふまでもない。

哀れ〳〵此の世はよしやさもあらばあれこん世も斯くや苦しかるべき

これは戀を歌つたものであらうが、しかし法師特有の悲觀詩と見るのが妥當である。哀れ〳〵と言つて、先づ果敢なんでゐる。此の世は假へさうならばさうあつても仕方が無い。が、來世までも此の現世のやうに

苦しからうや。定めし斯くばかり苦しくはあるまい。

近松巣林子も言つてゐる。『戀ひと哀れは種一つ』と。

我のみぞ我心をはいとほしむあはれむ人のなきにつけても

自分は戀ひに敗れた。乍併他人は自分を哀れんではくれない。孤獨なる自分は、たゞ自分で自分の心をいとほしむの他はない。

果然、寂しき人々は、獨のハウプストマンの創見のみではなかつた。

吾が西行こそ最も此の機微に通じてゐた詩聖ではなかつたか。

しなばやな何おもふらん後の世もこひはよにうきことゝこそきけ

わりなしやいつをおもひの果にして月日を送る我身なるらん

いく程もながらふまじき世の中に物をおもはでふるよしもがな

心から心に物を思はせて身をくるしむる我身なりけり

（四十五年四月十八日）

秋聲と圓喬

秋聲と圓喬

一夕牛込亭へ落語を聞きに行つた。一座は圓喬を眞打にして大阪の何とかいふ輕口話しを看板にしてゐた。浪花藝者の手踊といふのをも呼び物にしてゐた。つまり東京の落語家と大阪の落語家とをチャンポンに混せてゐた。私はその晩、大阪と東京との藝風、引いては、東京と大阪との趣味好尚を明歷と見分けることが出來たやうに思つた。

圓喬は當今落語家の泰斗である。東京にだつて圓喬のやうな落語家は、圓喬自身より他には無い。今は、俳優として、落語家の圓喬に比べられ

る俳優はないと思ふ。強いて求めれば、松助が矢張りそれに近い。

その晩、大阪の落語家は一々記憶してはゐないが、大抵何れも服裝からしてグロテスクな身裝をしてゐた。中にはまだ若い奴が、頭を圓めて、坊主のやうな墨色の衣服を着、白い綸子か何かの坊主帶をしてゐた。是等は、落語家が、肝心の落語そのものゝ藝で賣らうとするのではなく、まづ異樣の身裝で、自分の技藝の不足を補はふとする卑むべき遣り方である。さうして其奴が、橋盡しで何か話すのだと言つて、東京中の、あらゆる橋の名に因んで、支離滅裂なことを、調和のない不快な騷々しい聲で、ベラ〳〵と唯急はしく喋べり續けた。橋の名や町の名盡しは、近松も「天の網島」の心中の道行きの處などにも行つてゐて、一寸は惡く

はないかも知れぬが、近松のだつて、彼處は「天の網島」に藝術として決して良い性質を加へてゐるものではない。今日から見れば、近松に害をなしてゐるものである。

さうして其奴が一と通り喋り盡すと、此度は踊を踊るのだと言つて、件の僧衣を脱して長襦袢一枚になつた。倍々以つて溜らない。赤い處の多い、見るからケバ〳〵しい。全く鼻持ちのならぬ代物である。さうしてその襦袢一つで、踊るからと言つて、素直に踊るのではない。眞白い手拭で坊主鉢巻きをして、飛び上つて跳ね廻り、自分でもさぞ身體が痛いであらうと思はれるばかりに、ドタンバタン高座の板敷に身を投げ付ける。一體何をしてゐるのやら譯が解らない。客を馬鹿にしてゐるものだ。

大阪の落語家にだつて其樣なのばかりはないといふかも知れぬが、其輕口話しといふ、一と歳取つた、分別のありさうなのが、また藝に臭味が多い。何だか、之れも譯の解らぬ、踊のやうな、默戯のやうな、古いやうな新らしいやうな全く鵺的な惡形の盲按摩の科白のやうなことを行つてゐたが、その眼を瞑つて盲人の白眼を出す眞似をするのが、惡執拗くつて、人に強ゆる處がある。ずつと前年――私は近頃芝居を見ないから――團菊の歿後、始めて仁左衛門（その時分我當）が歌舞伎座に來た時であつた。原作は確か近松のので、何であつたか、今空には覺えてゐないが、助右衛門といふ老人に扮した。その老人は成程細かく寫實を行つてゐた。けれどもその熱く實を寫さうとする結果、餘りに眼やにを用ゐ

たり、鼻水を垂したりして穢らしかつた。坪内博士が、その時評して「餘りに細か過ぎる。」と私に語られたのを覺えてゐる。その時分、でも我當は何方かと言へば東京好きのする藝風と言はれてゐた。

で、私は、その晩も輕口話しの奴の盲目の眞似から、つひ古い、我當の老人に扮した時の記憶を呼び起して、それとこれを科學的に歸納して考へて、倍々大阪の藝風の臭味の所在を知つたやうな氣がしたのであつた。尤も其奴は、前の坊主の身裝をした奴に比べて、服裝などは何か知らぬがサッパリした風をしてゐた。

兎に角さういふ卑俗な藝人が出た後で、圓喬が高座に顯はれた。客の方から向つて右手の階段を上つて、一寸此方を向いて嫣爾と笑み、痔せてスラリとした身體を少し前屈みにして、小さざみな物靜かな歩調で席の中央に來て、座蒲團に坐り、それから懷中から紙入れと手拭の折つたのとを一所にしたのを取出して左手に置き、鼻紙を取つて靜かに鼻をかむ。私は、遠方から見てゐたのだから果して何物か解らなかつたが、兎に角藍色の澁い着物を着てゐた。全體が靜肅な感じを與へる。「八百屋お七」の前晩からの續きを話すと言つて、其のエピソードを話してゐた。私は續けて聽きに行かなかつたのを惜しいと思つた。お杉といふ、去る歴々の旗本に勤めてゐる娘が、フトした事の經緯の間違からその主人の及に罹つて殺された、その宿元の家庭——父母や妹などの日常の靜かな生活の中へ、その兇報が入つて來る處を話してゐた。その娘の家は町内

でも差配をしてゐる者の家であつた。私は其の僅か許りの圓喬の人情話しの一と條を聽いてゐて、不覺、古い江戸時代の町人生活の空氣の中へ連れて行かれたやうな心地がして、何とも言へず安らかな靜かな懷古的な滑らかな感情に漂はされてゐた。

ペータアやシモンスが凡ての藝術はその根調に於て音樂だらうとしてゐると言つてゐる如く圓喬の話しは、全體として、私に音樂的な快感を與へる。私は、圓喬の、跳つたり騷いだりせぬばかりか、初代の圓遊――は圓遊で何處か愛嬌に富んで、また其れ自からに於て好かつたけれど――などのやうに陽氣にはしやがないで、靜かに低い嗄れた口調で、手を膝に載せたまゝ急がず日常生活の平凡な一擧動一言語を語り出す處に自然な、生活の實際を浮動せしむる力を以つてゐるのを好む。

その晩の話しの中で、娘お杉の父親が朝湯から歸つて、つひ長くなつたと言つて、風呂で何とかさんに會つたものだからと言ふ邊り、妹娘のお兼が、二階の鏡臺の鏡の後から、姉さんの置き手紙を發見したと言つて、狽てゝ持つて驅け降りる。それを父が受取つて讀む處。

『暗い。お兼、一寸其處のざるを取つて、窓を明けな。』（筆者曰はく確かに斯うと、記憶してゐる。）と言ふ前後の光景などは實際を躍出してゐると思つた。さうして圓喬のそれを語るや、眞に一言一句の無駄がないと言へる。簡單な一と口でも全體を締めくゝり、全部に波動を與へてゐるのである。私は故の圓朝は、唯一度しか聽かなかつた。それも死ぬ少し

前で、その時既に病を助けて出演したのであつた。その時は、何でも若い、江戸の浮世繪師の名人が、阪東何女とかいふ、之れも若い踊の名人の藝を見染めて、戀愛し、遂々想ひが叶つて一所になるといふ簡單な話しであつた。その時クラシカルな題材だと面白く思つたゞけで、精しい記憶も殘つてはゐないが靜かな話し振りであつたゞけは確かに覺えてゐる。圓喬はその靜肅な點に於て先づ最もよく先師に似てゐると言はれてゐた。

徳田秋聲氏の小説は種々な意味に於て私をして人情話家の圓喬を聯想せしめる。一夕を寄席に過して、幾人かの落語家の話し振りの巧拙を比較し來る時、ある一ヶ月の諸文學雜誌に發表された幾多の小説作家の作品に目を通して、轉じて秋聲氏の作品に移る時、特にさういふ感じがする。

秋聲の、靜肅にして嬌激しない題材の取扱ひ方がさうである。平淡な筆使ひで、平凡な日常生活を描いてゐる間にも何處やら大きな人間生活の片鱗を窺はしめる。唯、圓喬は古い人情話しであり、秋聲は現代生活を寫す小説家であるといふ點に於て前者は落語家中にても特に多く筋の通つた物を語り、秋聲は寧ろ筋の無い物を描いてゐる。固より相違を求めたら幾許もあらうが多くの類似に於て秋聲の藝術は圓喬の藝術と似てゐる。秋聲は漸く歳が四十二年である。四十二と言へば、人間として、また藝術家として決して老人とは言へない。けれども秋聲の先師尾崎紅

葉が夭逝したのは三十七であつた。秋聲が四十二でそろ〳〵澁さの堂に入らんとしてゐると言つても、敢て誇張とは言はれまい。

六月の小説には別段傑出した物もなかつたが、作家には可成注意を惹く名があつた。「中央公論」に徳田秋聲、高濱虚子、長田幹彦。「新小説」に眞山青果、岩野泡鳴、鈴木三重吉。「文章世界」に田山花袋。「新潮」に小山内薫、水野葉舟。「三田文學」に永井荷風。「スバル」に森鷗外、江馬修。「太陽」に森田草平、小川未明。「早稲田文學」に中村星湖など。斯う名を列記して來ると、現在小説壇に活動してゐる作家では、藤村と白鳥とを逸してゐるのみである。中では虚子の「女弟子」と花袋の「線路」とは最も少き努力を費してゐるものであるらしいから、此處にそれに就いて云々するのは、兩家に對して稍々氣の毒であるから除き、爾他の作家は、その作品の出來ばえに照して、秋聲が「涙」に費したと殆ど同じ程度の努力をしてゐる物のやうに思はれる。之れは極めて據の無い斷定であるが、秋聲も「涙」にはさまで心血を絞つたものではなからう。それと同じく小山内氏の「捕縛」も葉舟の「偶像」も長田氏の「母の手」も三重吉氏の「櫛」も青果の「遁走」も各々所謂可い加減の努力に成つた物のやうに思はれる。夫れ故言葉を換へて言へば、強て努めずして、各作家の不斷の身上が出てゐる物とも言へる。兎も角も私は假りにさう定めて置いて讀んで見た。さてさうなつて來ると、各作家それ〴〵特質を備へてゐるが、秋聲の「涙」は矢張り巧妙である。長田氏の「母の手」

も文章は巧み、筋とて必ずしも有り得べからざる事を描いた物とは思はぬが、唯何となくあの作を讀んではまた泣くことが出來ない。之れに比べて秋聲氏の「涙」は自然に讀者をホロリと泣かす力を以つてゐる。作柄も題材も異つてゐるが、詰り長田幹彦氏の「母の手」も秋聲氏の「涙」も共に親子間の人情の涙を要求してゐるものである。「母の手」は、事を叙することも精しく文章にも相應に注意を拂ひ作家自身の感歎と嬌激ともあるが、何處やらまだ眞實の感情が出てゐない。之れに反して「涙」には嬌激の態度は少しもない。作家は唯、高座に坐つた圓喬の如き靜肅なる態度で死の報知に接し、死者の遺骸を眺め、遺族に對する同感のある他人の感情を叙してゐるに過ぎない。

お信は、直り母親の側に寄添つてゐる小供の顔を眺めて、目に涙を入染せた。

「どうするんです、此の子は……。」

「兄さんが連れて行つて、育てゝくれることになつてゐるんですよ。小い方は、私が連れて行くんですけれど、これの方はまだ何にも解りませんからね、清之助には、私も弱つてゐるんですよ。如何しても阿母さんの傍にゐたいつて肯かないんですよ。」

二人とも、涙が、ほろ〳〵と頰に流れた。

「それでも、此頃漸く宅の死んだと云ふことが、多少呑込めて來たやうなんです。御父さんがゐなくなつて、阿母さんと一緒にゐられないと云ふのなら、此處へ新に御父さんを一人貰つてくれつて、其樣事を言ふんですよ。」

お信は顔もあげられないほど、涙が湧出して、嗚咽の聲を立てゝゐた。

「宅が目をおとす時、これを指して、兄さんや私達に手を合して拜んだことを思出すと、私も如何にでもして自分の手元におきたいんですけれど、考へてみれば然も行きませんし……。兄さ

んも親切に言つて下さるものですから、まア遣ることにはしてあるんですけれど、別れる時は如何なだらうと想ふと、私は辛らございます。」

お信は體中から絞取られるやうな涙を禁めることが出來なかつた。……

一時、淺薄無思慮な自然主義の主唱者等が、(凡ての自然主義が悉くさうではない。)他人の涙のある物を書いたのを見てイヤ古いとか、何とか斯とか難癖を付け〳〵してゐたが、秋聲氏は、作家として自から泣いて掛らないと同時に、作中の諸性格の泣いてゐるのを見て、淺薄無思慮に、嬌激して冷嘲などもしてゐない。唯、世間通俗の人情を描いてゐるのである。秋聲を以つてまだ大作家と言ふことが出來ないとするも、作家たるには、今の秋聲の足跡を辿らなければならぬと思ふ。

六月の小説を概覽して、私は一人秋聲に對した時、恰も牛込亭の一夕群小落語家の中に一人圓喬に對した時のやうな感じがした。依而此の記を作る。

（明治四十五年六月十一日）

藝術品は感興を傳達するもの

藝術品は感興を傳達するもの

▲思想を發表する文章――論文――でも、事物を叙する文章――主として小説又は紀行文のたぐひ――でも文章の目的は、之を讀む者に、己の言はんと欲する道理又は感じを、十分に明快に會通感得せしむるに在る。文章の目的はその以外に無い。と言つても可い。

▲英國の文藝評論家アーサー・シモンスといふ人が、斯ういふことを言つてゐる。……藝術家は、その藝術品によつて、自分が感じた通りを、其の鑑賞者等にも感ぜしめねばならぬ。……今一層平たく言へば、藝術家自身で美と感じ、又醜と感じたる事柄は、如何なる讀者――小説の場合ならば――も亦たその通りに感ずるほどの力を備へてゐなければならぬ。

藝術家は、よく泣き、よく笑ひ、よく憤り、よく興がり、よく和し、よく憂へねばならぬ。さうして其等の、泣き、笑ひ、興がり、憤り、憂ひたる事と場合とを宛ながらに讀者或は觀客或は聽衆の面前に運び來つて、彼等をして又自己と同樣の悲喜哀歡の激情を挑發せしめねばならぬのである。

▲此の目的を達するのが文章である。シモンスといふ人は、また、言葉が標象の最初である。とも語つてゐる。成程さうである。言葉ほど標象

的なものはない。文字もまた從つてさうである。

言語又は文字が、唯、單に言語又は文字の爲に存在する場合には、その言語又は文字は死言語又は死文字と言はねばならぬ。所思所感を明快に讀者に傳達し得るに至つて始めて其等の文字は生きてゐるのである。

▲小說は、藝術家が、或る感じたる事物を、讀者の前に提供して自身感じたと同樣の感興を、讀者にも促起せしめんとするものである。

尤も場合によつては、小說作家自身が感じたる以外の感興が、讀者の或る者の間に生起することがある。この場合、藝術家自身は、表面、さういふ感興の生じ得ることを知らなかつたのである。然り唯、表面、知らなかつたのである。言ひ換へれば、彼れ自からは無意識であつたのである。けれども彼れは其れを意識しないで承知してゐると言つても可いのである。

天才に富んだ科學者等は、大自然界から、蒸汽力の如きものを發見して、汽車や軍艦の如き重量のあるものをも容易に動かさしめる。また電氣の如き、一言に言へば肉眼にて視ることの出來ないものゝ存在してゐることを知つて、それを種々なことに利用する。音響學からは、蓄音機のやうな、死んだ人の聲が何時までも生き殘つてゐるやうな、不思議な機械をも發明するけれども、大自然は、人間が發見して行くまでは自分では默つてゐて、人間に敎へてくれない。大自然は無意識なのである。

▲恰もそれと同じやうに、藝術家自身ではさうと氣が着かなつた感興を

も、讀者の或るものゝ心の中に生せしめる。けれども、斯の如き感興を生せしむる藝術品を創造し得た作家は恰も大自然に類する小自然である。さうして此の小自然は、吾々が、丁度碧空白雲を仰ぎ、また清水に魚の躍るを見る如く、その中に存在するものを、明快に讀者に認めしめねばならぬ。讀者は、藝術品の如何なる部分かを明瞭に認めて、それに依つて或は怒らされ、或は泣かされ、或は哀まされ、或は苦まされ、或は歡ばされんことを豫望して藝術品に臨むのである。然るに其の藝術品が、遂に何等の感興をも與へ得ないとすれば、何と贔屓をしても價値ある藝術品とは言ひ得ないのである。

▲それ故に、此處に一つの藝術品が出來上らうとするには、先づ藝術家自身が、感受性の強い人でなければならぬ。感興の度の高い人でなければならぬ。さうして藝術品は、それ自からに於て獨立の價値を有するものであるから、作品が立派であれば、それで十分なのである。敢て低級の多くの鑑賞者等の存在を必要としないのである。藝術品の鑑賞に就いて、自己の抱いてゐる標準——或は理想——に信念の強い、藝術を愛慕する情の深い、また其の藝術品によつて、口を糊せんとする窮乏を感じない人に取つては、彼れが自分で十分滿足するものを作り得たならば、それで可いのである。他に鑑賞者を誘ふ必要を認めないのである。

また作者自身ならぬ鑑賞者とてもさうである。鑑賞者は自己の愛好する藝術品を十分に愛好して、その藝術品が與ふる感興に耽り得れば、そ

れで鑑賞の目的は達せられてゐるのである。此の場合も同伴者を誘ふ必要はないのである。

藝術家は、『自分で滿足したのを作り得た歡び』が十分に充實してゐれば、それで可いのである。

▲さうして感受性の強い藝術家が、自分で起した通りの感興を讀者に傳達するには、その言語又は文字を十分に選擇せねばならぬ。此意味に於て文章は決しておろそかには出來ない。もし文字の選擇が當を得てゐないと、藝術家自身の感興を傳達する邪魔になる。よく文章は如何にも達者であるけれど、殆ど何等の感興をも有しない作品に接することがある。其れ等は文字に累せられて、感興を不明瞭に了らしめるものである。或はまたその場合は、作者本來の感興が不十分であつたのかも知れぬ。

印象的描寫

▲作家の感興を、さながらに傳達するには、その感興を作家の感情中に生起せしむる原因となつた物象が作者の眼に映つた通りに、また讀者の眼前にも浮動せねばならぬ。

藝術家が、ある美人を美しいと感じたならば、その美しいと感じた感じを、讀者の感情中にも生起せしめねばならぬ。さうするには作家が感じた美人が、明かに紙の表に浮いて見えねばならぬ。その浮動といふこ

とには、前にも言つたやうに、文字の選擇が頗る必要である。

けれども、繪畫と異り、小說は、畢竟、文字を以つて其等の感じを標象するに過ぎぬのであるから、同じく美人を描くにしても感興傳達の用具に一層の不自由を感ずる。色彩を用ゐ得る繪畫は血と肉とを描いて見せることが出來る。之れに反して文字のみに依賴せねばならぬ小說は、容貌を描くにしても輪廓にしか達し得ないといふ憾みがある。

▲固より如何なる方法を用ゐても可いから十分に浮動しさへすれば目的は達せられるのであるが、一言に摘んで言へば、近時の描寫法は印象的であることを貴ぶ。唯、徒らに文字を使役したばかりで、美人の容貌が浮いて見えるものではない。繪畫は其の巧みなると拙なるとを問はず、巧みならば巧みなる限りに於て、拙ならば拙なる限りに於て、畫面に表はされたる以外に聯想を馳する必要が無い。

之れに反して、文字に依つて描く容貌は、多く聯想に訴へねばならぬ。

前に、藝術家は、『自己が十分に滿足すれば可い。』と言つたが、之れを鑑賞者に示す場合には、その鑑賞者の聯想力を豫想してゐなければならぬのであるから困難を感ずる。標象――文字――といふことは、聯想に訴へることの量がおほいのである。けれどもまたその代りに、讀者の聯想に訴へる便を利して、略筆を用ゐながら、その容貌の持主なる美人ならば美人の性格にまで、容貌から聯想を馳せしむることが出來る。或はまた、其の反對に性格を叙して容貌を聯想せしむることも出來る。

此の意味から言へば、前に色彩の便を持たないで、輪廓にしか達し得ないと言つた文字の描寫法の方が一層自由と深味とを有つことにもなる。

▲大塚楠緒子女史が四十三年四月の「趣味」に「別の女の顔」といふ短篇小説を書いてゐる。その中に二人の女の顔を書いてゐる。作の筋は、身分の好い、何一つ不自由を感じない三十男が、好い處から新婦を娶つたが、その美人を我が物として領し得た滿足の感の刹那に、直にまた一味の不足の感を抱いた。それは、その細君を持つ以前に、男として初めて知つた女に對する追憶の情で、今も滿足だがまだ以前の女の方が戀しい、その戀しさに何だか、滿足であるべき今も不滿に感ずる。といふ心持である。

で、細君の方の顔は何う書いてあるか。といふに、

……會見の時に始めて逢つて、朦朧と見覺えておいた容姿の他に、切れの長い眼がぱつちりと、櫻色の頰の上に活々と輝やいて居ることや、脣が二重に、ふつくりと、括れてゐることと、三日月形の細い眉尻に黒子が二つもあること、小鼻が少し怒り過ぎてゐること、指の爪が、可愛らしい貝爪で、掌に觸ると、何時も少し汗ばんでゐることなどを新らしく知つた。麻の葉の絣の着物を着て、渦卷の形のある帶を締めて丸ぐけにした絣縮緬の帶止をして、桔梗色に褪紅色の模樣のある半襟をかけて、高島田に結つてゐる新婦姿は、まるで人形のやうに綺麗だと男は思つた。

流石に女の筆ほどあつて、細かに描いてはあるが、唯々羅列的に書いてあるまでゞ、さまで讀者の情を惹かない。或は此の場合は、作者が意識して、さう書いたのかとも思つたが、さうではないと知れた。何故なら

ば作者は此の新婦をも十分美しいものゝやうに書いてゐるから、美しく書かうとしたに違ひない。また作意から言つても、此の方の女をも美しう書かねば、他の女のことを思ふ意味が通らないのである。何故ならば、一層戀しいものといふ感じを湧かさねばならぬ。さうするには、比較せらるゝ方をも美しうせねばならぬ。で、他の女は何う書いてあるかと見るに、それはよく描けてゐる。

……七日め（結婚後）の夕方であつた。未だ灯のつかない薄暗い部屋の中に坐つてゐた男は、不意に、その薄暗い部屋の隅の方に幻のやうに別の女の顔を見た。此間中、うつかり忘れてゐた女の顔を不意に思ひ出したのである。桃割に白丈長をかけて、ふつくりした鬢に包まれた、眼元の可愛い、笑靨の深く刻まれた顔である。

それは、三十歳の今日まで、決して近く女の髪の匂を嗅いだことのない彼れが、始めて接した女の顔であつた。

男世帶を持つてゐる男が、ほんの、ある時の機會で關係をつけた、雇つてあつた老婢の末の娘であつた。年齢は十七で、教育はないが、士族の娘といふのが、顔にも擧動にも能く現はれてゐる女で、姿の小さい少し蒼白い顔色をしてゐるが、愛くるしい片笑靨を持つてゐて、聲音の澄んだ、聲を聽かせて、容姿を偲ばせるといふ風の女であつた。白粉なんぞは塗らなかつたが、綺麗な顔をしてゐて、髪の手入れを何時も好くしてゐた。皮膚は、きめ細かで、色も白かつたが、水仕事をするので、冬は手の甲が紅くなつて、痛さうに皸が切れてゐた、可憐さうだと思つて撫でゝ遣りながら、

『指輪を買つてあげやうか、』

と、言ふと、

『こんな手に指輪なんぞ。』

と、うち消して笑つて仕舞つた。

それが終に因果を含ませられて、若干かの金子を貰はされて、温順しく悄然と泣きながら、家を出て行く時の慘めさといつたらなかつた。

此の、後の女の方は、姿も性格も出てゐる。此處では性格といふ性格ほどのものを書いてゐないが、併し、容姿によつて性格を髣髴することが出來る。

引證して文章の中にある如く、

「……聲音の澄んだ、聲を聽かせて、容姿を偲ばせるといふ風の女であつた。」

此の、聲を聽かせて、容姿を偲ばせるといふ風の女であつた。といふ形容は、極めて略筆であるけれども、此の場合十分に効果がある。之れが、前に言つた性格を叙して容貌を聯想せしむる方法の簡單な一例である。で、斯ういふ場合には、鑑賞者の聯想力に待つ處が多い。藝術の鑑賞者が作者と同じ程度の修養を有つてゐなければならぬのも之れで分る。

さうして聲を聞かして容姿を偲ばす。といふが如き形容法は、その點を讀んでも直に分る通りに、前の新婦の場合の形容の如く、作者の感じが、唯、眼に映つた部分のみに止らないで、多少深味に入つてゐる。さうして容姿に對する感想の種類が違ふ。言ひ換へれば感じ方が新らしい。とでも言つて可い。さうして印象が直截である。之れも容貌を形容する一つの方法として心得てゐてよい。

▲印象的なることを何故に尊ぶかといふに、それは後から段々に分つて來ると思ふが、例へば紅葉山人の時代の形容法は、「金色夜叉」のお宮の容貌又は身裝を描くにしても、髪の形から、それに挿した櫛の類に至るまで悉く細叙し、耳、目、口、鼻、皮膚の色、手足の形までも叙して殘さないといふ風であつた。

尤も長篇であつて、既にその女性の平常の縹緻――天性にして變らない――をも說いてある後とすれば特別に、ある一日の身裝などは細叙して可い場合もある。何故といふに、それは、其の女性の平常の縹緻は既に分つてゐるが、更に他所行きなどの時に如何なる服裝をするかと說明をすれば、その女子の趣味又は生活程度が分つて、それに依つてその女子の種類、又は、人と爲りを明かにすることが出來る。

▲けれども短篇などの場合は、細叙の必要がないのみならず、むしろ全體の均整上妨げとなることが多い。さういふ場合には、一々顏の形容などをしないで、成るべく略筆を用ゐながら、顏も、性格も、その女子の境遇又は生活狀態などを一目の下に浮動せしむることが出來る。

▲で、印象的といふことが、何故事物を浮動せしむるに都合が好いか。といふ道理に、談話を運んで行つた。何故かといふに、印象的は、心理上に事實であるからである。例へば、吾々がある座敷に入つて行つた場合に、まづその座敷の特質ともいふやうなものが、殆ど無意識の間に感じに上る。女の顏や形を見ても其の通りである。

ある女ならば、女の持前とでもいふ、天性の實質的の部分もあるのだから、眼が大きいとか、色が白いとか、髪が薄いとかいふやうなことも、固より叙して可いのであるが、それと共に、また、ある場合々々によつて變る顔形を叙することに注意せねばならぬ。で、さういふ場合は、前に言つた、その女の平常の實質以外に、極めて印象的に作者の眼に映つてゐる道理なのである。それはモデルを用ゐて居ると居ないとを問はない。讀者はその點には無關係なのである。何れにしても、作者が具象化を與へて一篇の藝術品を作るまでには、必ず作者の眼に映つて來るのである。さうしてその場合々々によつて變る顔を叙して行くといふことは、詳しく言へば、「六ヶ敷さうな顔をしてゐた。」とか、「泣いて眼を赤くしてゐた。」とか、「眞青な、凄い眼をして居た。」とか、「ニコ〳〵して陽氣な風をして見せた。」とか。「哀れに悄然(すご〳〵)として見えた。」とか、いふ類ひである。

▲實質的の形容は長篇にあつては、一應は細叙して置いても可いが、此の印象的な、その時々の場合によつて變る顔を、一寸々々略筆で寫して行くのは、常の女の姿態を紙面に活躍せしむる上に極めて有効である。

▲前にも言つたやうに藝術品は、作者自身にまづ感じたことを、更にその藝術品によつて、讀者にも同じく感せしむるものであるから、作者が、女の喜悲哀歎の狀態を目擊したならば、その喜悲哀歎の樣を、まづ自身感じて置いて、それをまた讀者が感ずるやうに、作者自身見た場合と同

じやうな形にして表出するのである。此の表出は浮動せねばならぬこと勿論である。それをするには、常の姿態が活きて動いて居る部分を掴むのが最も有効である。

近來の作が、特に顔を形容しなかつたりするのも、それ故である。即ち顔をば特に書かないで、動作を、性情から聯想せしむるのである。それは既に前にも言つた。けれども作の構成の種類によつて、顔を形容しても差支へない。むしろ矢張り形容するのが、その作品を賑やかならしむる一方ともなるのである。

▲水野葉舟の『おみよ』といふ作の初めに、そのおみよの顔がよく書いてある。

「この列車の三等室に二人連れの女が乘つてゐた。一人は樣子の如何にも、ものの馴れた、肉のしまつた、眼のはつきりした强味のある、少し長い中高の顔で、眉の薄い、鼻の小さい、口の大きく見える、青いと思はれるほど、色の白い女。も一人の方は、それよりは六つ七つ下の、ぽちや〳〵肥つて、色の淺黑い、調子の面白さうな娘。

これは、長篇の中に表はれる女の實質的部分を形容したので、よく書いてある。つまり書き方が可いのである。

▲それから、その場合々々によつて活躍する樣を形容するのでは、高濱虛子氏の巧みに浮動さしてゐる例が頗る多い、「俳諧師」の中に、五十嵐

十風の、女郎上りの細君の容姿を形容してゐる處に、作者は、

……「細君は、又大きな口を、ぱくりと開けて笑ふ。」

といふことを、一作中に度々言つてゐるが、それが少しも邪魔にはならないで、その女の顔付から、性質のタルミある處までを説明し得て有効である。「ぱくりと口を大きく明ける」といふことは極めて簡單なことであるけれども、それが、何故に有効であるか。といふに、その場合場合に活動してゐる時を捉へてゐるから、何時もぱくりとあけるやうな女だなと思つてそれが性格を説明するのである。

それを、短篇小説ならば、「よく、口を、ぱくりと大きくあける女であつた。」とでも説明するか、それとも一度「ぱくりと大きく口をあけた。」とでもしたら可いのであるが、長篇では、そのあけた場合毎に繰返しても必しも妨げとはならない。

▲その他、同じ虚子氏の「凡人」の中に、「三疊と四疊半」といふのがある。その中に、お秋といふだゞつ兒娘の樣をよく形容してゐる處がある。それなども、一ヶ處毎に、その女の顔の不變な部分を實質的に描いてゐるのではないが、場合々々に活動してゐる時を書いてゐる。全篇を通讀した上で、自から讀者に、その女の性格を併せて聯想せしむるといふ風である。例へば、

「……細君は娘が洗髪で唇に毒々しい臙脂を附けて、ぢろ〳〵と人の風體や荷物を見るのを腹立たしく思つた。」

作者は、またその娘を後になつて、元日の朝、

「……表を見ると、多勢羽子を突く小娘の中にお秋も交つてゐた。お秋は平常着のまゝで、それでも下駄と足袋だけ新らしいのを穿いて、襟に白い木綿のハンケチを卷きつけて小娘の中に交つてゐた。」

之れなども、讀者の聯想に訴へた、趣味のある書き方であつて、正月の元日の朝、自分はもう可い加減大きな歳や身長をしてゐながら、其處等の小娘の中に混つて、下駄と足袋とだけ新らしいのを穿いて、襟に白いハンケチを卷きつけてゐる。といふことだけでもその娘の境遇や、性格を髣髴することが出來る。

何度も繰返したやうに、作者まづ感じ、その感じをもう一度あるものに客觀的に具象化して見せて、讀者にまた同じやうな感じを起さしめる工夫をせねばならぬ、それ故に、最も必要なのは感ずることである。

▲さうして殆ど此の感じのみを以て顏を形容してゐるのは、國木田獨歩氏の作にその例がある。それは實質的を最も離れた、殆ど感じのみの形容法である。『獨歩集』の「女難」に

「……けれども母と叔母は對坐でゐても決して笑ひ轉げるやうなことはありません。二人とも言葉の少ない、物案じ顏の、色彩の惡い女でしたが、何か優しい低い聲で、ひそ〳〵話し合つてゐました。一度は、母が泣顏をしてゐる傍で叔母が涙ぐんでゐるのを見ましたが、私は別に氣にも留めず、たゞ一寸可恐いやうな氣がして直ぐと茶間を飛び出

したことがありました。」

此の他、獨歩氏の作中には斯ういふ例が多い。之れは、前に引例した大塚楠緒子女史の『聲音を聽かして姿を偲ばせるといふ風な女』といふ形容と、よく似た形容であるが、大塚女史のは、此の場合の例は內容が簡單であるが、獨歩氏の此の場合の例は頗る複雜である。さうして大塚女史の場合は聲といふ音によつて形容してゐるが、獨歩氏の場合は『泣く』とか、『物案じ顏』とか言ふやうな、沈んだ動作によつて形容してゐる。けれどもそれだけでも讀者の腦裡に聯想を生起せしむるに十分である。さうして、最後の『恐いやうな氣がして飛び出した。』といふあたりは、觀る者の動作によつて、向の女の顏を形容してゐるといふ、面白い結果になつてゐる。

▲凡て形容は、之れを實質上から描くにしても、またその場〳〵によつて活動せる姿を印象的に描くにしても、强く對象の特色を感ずることを最も必要とする。

私は、トルストイの文章が好きだ。翁の文章は之れを英譯で讀んでも、頗る明快といふ感じを與へる。さうして顏形の形容なども、描く人――作者――の趣味から入つて行つてゐる、といふ處がある。例へば『復活』の、カチウシヤといふ小間使の顏を、

『……カチウシヤが、彼方で、「只今」と、よく聞き馴れた愉快な聲で返事をする、それを聞いて、ネクリュウドフは腹の中で思はず、「叱るな！」

と叫ぶ。それから、カチウシャが、咖啡を持つて入つて來る。見ると、相變らず少し藪睨(やぶにらみ)の、生な黑い眼元で憶ひである見方をする。さうして過日の通りの眞白い前掛をかけてゐる。』

之れは、作者の趣味――或は官能から入つた形容である。此の場合は、ネクリュウドフといふ青年が、その小間使に戀情があるから、戀情のあるやうに書いてゐる。

要するに形容は唯、單に形容するのだけでは浮動して來ぬ。その形容の裏に、作者の好惡的判斷が加はつてゐなければならぬ。それがある場合々々の活動に際して表はれる時は、一層さうなる道理である。その時は勿論泣いたとか、笑つたとか、悲しさうであつたとかいふのであるから、自然、對象に對する判斷が明快になつて來る理由(わけ)である。

（四十三年八月）

女殺油地獄

女殺油地獄

近松の「女殺油地獄」を、又取出して讀んで見た。明治時代の作者の作にも傑作がない。といふのではない。が、昔時の作者に傑(すぐ)れたのが隨分多い。束の間も靜止といふことを知らない思想風俗人情道德の變遷に遭遇し、百年千年の歲月の力にも堪へて、尙ほ吾等の間に殘り、讀まれて、吾等と共通の脈膊を感せしむるほどの作は、古い言葉であるが、所謂人間の不朽の人情に觸れてゐる處があるからだ。西鶴もさう。近松もさう。

近松の中で、此の「女殺油地獄」が、題材の上で彼の數多ある作の常套(ヴェンション)を脫してゐるのみならず、心理描寫といひ、その取扱ひ方といひ、最も深刻で最も複雜で、自然的であることは、明治の批評家の間にも夙に唱へられてゐることであつて、坪內逍遙氏の物せられた、此の作に關する批評は、「近松研究」の中に收められてある。暫時「近松研究」の話になるが、自分は平常鑑賞批評家として、坪內逍遙氏に長所を認めてゐる。さうしてその鑑賞批評は、明治時代の作に對するよりも、德川時代文學——就中近松に對する最も明快にして洞察のある批評眼を窺ふことが出來る。今日の眼で、其の「近松の研究」を讀んだならば、諸性格の人生觀に關聯する佛敎思想などに就いて聊か異議を挾むべき部分が無いとも言

へぬが、概してその委曲周到なる解剖批評は、一種の批評的創作と見るべきものである。文章も頗る光彩に富んでゐる。

自分は此處に「女殺油地獄」を批評するのではない。それ故讀者は既に此の作を一應讀んでゐるものと假定して、あの中の傑れたる部分〳〵に就いて少許り偶感を述べやうと思ふに過ぎない。西洋の學者も言つてゐる。自分も時々言つたことであるが、人生觀照の場合に、批評家は、作家と同じ程度の精神修養に達して居らねばならぬ。特に此の作のやうな男女の戀愛でなく、親子の恩愛を一篇の主意にしたものに對するにはさうである。境遇や事情の相違はあるが、近松の傑れた作の多くは、愛に心中を描いてゐる。此の作は親子の恩愛と殺人强盜とを描いてゐる。沙翁の諸作の中でも「リア王」の老父とその娘達との關係を描いたものが、作者の人生觀照の最も圓熟した時期を示すものなさうだが、此の「女殺油地獄」も通常人の最も現實的な生活を題材としたものである。作風文體などの時代の範疇以外に脱することの出來ぬのは、今更咎め立てすべきでない。吾等は、唯その藝術上の舊形式の中に盛られた不朽の人情を味ふべきである。

さうして讀者は、斯の如き作を讀むには、必ず先づ當時の大阪の町人生活の概觀を背景として頭に有つてゐなければならぬ。明治時代の獨身者の讀者が主觀的に狹隘に、自分等の生活と何等の交渉の無いことを理由として是等の作を排斥したならば、排斥するものが、自己の文藝鑑賞

の無能力者たることを自白するに過ぎない。

主人公油屋與兵衛は、當年二十三。まだ親係りの次男で、惡性な手におへぬ放蕩者である。今の父親はなさぬ仲の繼父で、實の親先代德兵衛は與兵衛が四つ、長男太兵衛が七つの時に亡くなつた。それを、母親お澤の實兄森右衛門といふ士分の伯父が計らひによつて、手代を入夫に直した。それが今の親德兵衛で、正直過ぎるほどの實意者。その夫婦の仲におかぢといふ十五の娘がある。一間半間口といふから小體な小賣り商ひの油屋である。兄の太兵衛は弟に似ぬ律義者の商買熱心で、別家して營業してゐる。

手代が娘の婿に取立てられるは、町家特に大阪には最も有り勝ちな風習であつて、與兵衛が始末に了へぬ放蕩者になつたのも、一つは天性であるが、後天的の原因は、さういふ兩親の關係によつて自然父親の威壓が利かなかつたといふことに歸する。

何うかして與兵衛を眞人間にならせたいといふ繼父德兵衛の心盡しの裏には常になさぬ仲といふ氣兼氣苦勞が付き纏うてゐる。

現實界には色々な場合がある。繼父又は繼母が繼兒を虐待するを經緯した悲劇もある。然るにこれは反對に、繼父なるが故に一層繼兒を大事に思ふやうに作られてゐる。其の點に複雜な人情が表はされてゐる。さうして其の繼父子の關係の狀態に依つて複雜な人情が、德兵衛といふ實意者の性格、與兵衛といふ淺慮な無智な思ひ切り我儘者の性格によつて、

巧みに單純化（リムプリフヴイ）されてゐる。

徳兵衛は手代――以前は奉公人筋――上りの繼父なるが故に親の威壓が足らぬ。それには徳兵衛が個性の實意者律義者といふ原因もあらう。繼父なればこそ繼兒も遠慮氣兼もあり、昔時のことを聞けば、血筋の通はぬ今の繼父に對して恩義をも感ずべき道理なるに、今樣の言葉で言へば純本能的な與兵衛は、それを少しも辨へず、繼父の子に甘いことを好いことにして、我儘の有りたけを盡してゐる。世間並から言つたならば、不自然とも見えるまでに自然的なのが、此の篇に表はされたる現實であつて、與兵衛もまたそれに連れて不自然と見えるまでに自然的である。普通の義理人情からいへば、出來ることでない間違つたことをして悔とせぬ。父親――しかもなさぬ仲の、大切に養はれた恩のある繼父を足蹴にしたり踏付けたりする。作者の所謂「惡性の上塗り」をする徒輩（てあひ）である。

筋向の同じ油屋商賣の、内儀（おかみ）お吉といふ、平常深切に世話にこそなれ、何一つ恨みも罪もない女を、自分が道樂の借金に詰つて、新らしい借錢の强請を言ふたが機會にて、微妙な心理狀態の進轉から慘殺をして遂に强盜に成つて了ふ。

近松の諸作の中でも、特に此の篇の如き「太平記」流の文脈を追ふた抒情文の少い、記述的部分の多い作にあつては、文章の優れた點がやがて性格の活躍してゐる處になるのであるが、上の卷で、野崎詣りの掛け茶

屋で、與兵衛が同商賣の色友達、刷の彌五郎、皆朱の善兵衛と、お吉の休みゐる傍に腰掛け、お吉が、與兵衛の兩親に倅の異見して下されと、私等夫婦が折り入つて口説れたと、身持ちを持ち直すやう深切に言つて聞かして、出て行つた後で、皆朱の善兵衛が、

「あの女は與兵衛が筋向の内儀樣でないかい。物ごしも、どこやら戀ひのある美しい顏で、扨々堅い女房ぢやな。」

「されば、年もまだ二十七。色はあれど數の子ほど產み廣げ世帶染みて氣が高尙。好い女房に、いかい疵。見懸けばかりで美味の無い。飴細工の鳥ぢや」と笑ひける。

兩親に成り代つて、深切に說き聞されても馬の耳に念佛。難有とも深切とも思はないで、氣に入らぬか返事をせぬ。彼等惡黨仲間の氣質が此の邊の叙事や會話によく表はれてゐる。

難有いとも深切とも覺えねばこそ、却つて、女房が立ち出た後から、深切を鼻の尖で笑ひながら、女の品評などをする。此の文章に、お吉の、まだ色香深い、さうして堅い町女房の風格がよく表はれてゐる。下の卷で、借錢の强請を言ふ處で、

……「なるほど金は奥の戸棚に、上銀が五百目あまり。錢も有りは有りながら、夫の留守に一錢でも、貸すことは、いかな〳〵。いつぞやの野崎詣り。着る物洗ふて進ぜたさへ、不義したと疑はれ、云ひ譯に幾日かゝつたやら、喃うとましや〳〵。歸られぬ內其の錢持つて、早う往んで下さんせ。」といふほど傍へにじり寄り「不義になつて貸して下され。」「ハテならぬと云ふに、くどい〳〵。」「くどう云ふまい貸して下され。」

上の卷で、他人の深切を鼻の尖で笑つた與兵衛の性格は、中卷を經て

下卷に到り、いよ〳〵明快に描かれてゐる。此の如き場合は、吾々讀者は第三の立場(たちば)にあつて十分落着いて現實の世相を觀照せねばならぬ。作者も第三者である。讀者も第三者である。けれども作者たる第三者は、作者といふ地位に制せられて（勿論當然の事であるが）道德上の判斷を露はに語つてはゐない。が、吾々讀者は批評家の立場に居て、それを批評せねばならぬ。

「いつぞやの野崎詣り。着る物洗ふて進ぜたさへ、不義したと疑はれ、云ひ譯に幾日かゝつたやら、……」

全篇を通讀した讀者の眼に映ずる處に從へばお吉程埋らぬものはない。毎時も「他人の深切」――純粹な深切を仕向けながら、迷惑ばかり被てゐる。現實世界は斯の如き矛盾に富んでゐる。與兵衞の如き義理人情の辨へのない、流行語で言へば純本能に殉する盲目的な動物的行狀を敢てする者に出會しては、出會した者の迷惑察すべきである。與兵衞は實に盲目的の自然その物である。彼の行狀には殆ど理智的判斷がない。兩親の恩愛それほどの恩愛ある者に借錢からの迷惑をかける不便さ。切迫した借金は是非返さねばならぬ。といふ辨別などはあるやうだが、人間らしい考といふのは、たゞそれだけ。

深切を冷笑で返へす與兵衞は、「肝心お慈悲の錢の足らぬ。」處より、我儘の上にも我儘が募つて、それでは、「不義に成つて貸して下され」とまで無理を言ふ。夫の留守に錢を貸せと言はれるさへ迷惑なるに、「不義に

成つて貸せ。」といふ。嘗て深切に着物の洗ひ雪ぎをしたのが不義と疑はれ、それで迷惑をしてゐるのを、氣の毒とでも思ふことか、其樣ことは此方は知らぬといふやうに、ぢや不義になつて貸して下され。と難題を言ひ募る。繰返して言ふ。眞純な深切から、理由もない輕い疑ひで直ぐに晴れたとは言ひ乍ら、不義したと疑はれてまで深切をして、今また、そんなら不義になつて貸して下され。といふ。此の與兵衞の他人の迷惑といふことに少しの察しのないこと。お吉が、さぞ迷惑に思ふであらう。

いふ讀者の洞察が肝要である。作者は、讀者に此の洞察力さへあれば、十分此の性格悲劇を味ひ得るやうに書いてゐる。「不義になつて貸して下され」言葉は簡短であるが、全篇を通讀した上で、此の邊に注意をすれば、與兵衞の盲目的な動物的な純本能な性格が輪廓明かに描かれてゐることが分る。さうして果ては「人を殺せば人の歎き、人の難義といふこと」に頓着なく、「オヽ、死にともない筈尤も〳〵こなたの娘が可愛ほど己れにも己を可愛がる親父がいとしい金拂ふて男立てねばならぬ。諦めて死んで下され。」と言ひつゝ、深切にして一點の曇りもないお吉を殺して了ふ。何たる純本能的の勝手者ぞ。言ふを休めよ。近松古し、と。近松は今日の吾等に取りて最も重要るな道德問題を提供してゐる。

與兵衞は無學無敎育な暴漢であるが、世の中にも、學問も有り敎育も有る筈の人物に、斯ういふやうなのが往々ある。さうして斯の如き我儘な淺薄な性格の人物に、有り勝ちに、他人は親や兄弟ほど遠慮なく强か

つたり、從つて恐ろしかつたりせぬものだといふことを辨へない。他人同志は分け隔てがある故に、互に人の人格を尊重して、利益を傷けないのだ。といふことを知らない。只表面上に、親や兄弟に遠慮があるが故に、却てさまで過激なことも仕向け得ない。けれども他人は相互を尊重するが故に、お吉なども、與兵衞に對しては母親お澤ほどにひどく當らぬ。之は三尺の童兒にも分る當然のことである。お吉は他人である。お澤は實の親である。實の親なればこそ杖を取つて倅を打ちもする。お吉は只他人として深切である。優くもある。然るに與兵衞は其の親をば「母の鎌がわせた。」と言つて恐れ、他人のお吉には無理、難題、强請、殺人、强盜の災を蒙らせる。淺見短慮な心から言へば、お吉は弱者の優しさ、

と言ふであらう。そんな馬鹿なことはない。お吉は他人なれば優しいのである。與兵衞の如き動物性の勝つた純本能的の性格には唯表面上、母親は恐いから强い。他人は優しいから何處までも無理を言へるものと思つてゐるやうな處がある。今日でも純本能的の行狀をする種類の人間には教育あつて與兵衞に類する者がある。他人として遠慮をすれば、付け上るといふ種類の人間がある。與兵衞が母親の實の兄太兵衞に弱くして、他人の優しさや、なさぬ仲の遠慮のある繼父德兵衞に强いのは、理智から來た强いのではなくして、動物的盲目的に强いからである。眞正の義理人情から言へば、繼父や他人で親切なお吉などに對しては讓步とか「濟まぬ」といふ考がなければならぬ筈である。然るにさうでないのが與兵

衞の與兵衞たる所であつて、此の意味深くして人間の矛盾に充ちた部分を取つて題材にしたのが、近松の作の傑れてゐる點である。

尙引證して品評すべき優れた描寫の箇處も多いが、繼父德兵衞を踏付けにするのも、お吉に無理をいふのも、性格の一致を保つてゐる明快なポイントであつて、同時に與兵衞の、理由もなく、唯表面、吾に强くさへなければ如何樣に扱ふとも構はぬ。といふ無遠慮な見境のない性情の表はれてゐる處が、やがて此の性格悲劇を解剖する關鍵だと思つたから、少しくどくなつたが、敢て其一點に注意を惹いて置く。

（四十三年十一月十六日）

5536

内務省警保局検閲濟

内務省警保局認可番号

大正二年九月十二日印刷
大正二年九月十五日發行
大正二年九月二十日再版

現代文藝叢書
第廿九編（新古典趣味）
實價金貳拾五錢

著作者　德田浩司
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田靜子
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷者　金子久太郎
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所　三協印刷株式會社

發行所　春陽堂
東京市日本橋區通四丁目五番地
電話本局五十一
振替口座　東京一六一七

現代文藝叢書續刊豫告

沼波瓊音著　行雲
江口福來著　菊五郎格子
長田秀雄著　琴平丸
和氣律三郎著　オスカー・ワイルド
後藤末雄著　古都情話

松居松葉譯

脚本 二十世紀

（文藝協會公演）

思ふに此「二十世紀」の譯者としては、現に非常の精力家であつて健筆家でもあり、嘗て小説家でもあつて飜譯家でもあつた演劇の改良家、內外劇に精通した諸種の脚本作家でもあつてオペラの作詞家でもあり、經驗に富んだ舞臺監督でもあり、外國の風俗通でもありショーの知人でもあり、婉曲露骨な嘲罵諷刺の達人でもある駿河町人子、松居松葉君ほど其任に適した人はあるまい。全くあるまい。（坪內博士序文の一節）

實價金五拾五錢送料六錢

（再版）

長田幹彦著

船客

(橋口五葉表裝)

小說　船客、旅人

戲曲　舞姫 DAHJA、司祭と女

海の悲しみ、濃霧

小品　潮來より、小樽より

横濱より、泉州堺より

鎌倉より、京都より

實價金八拾錢送料金八錢

(新刊)

森田草平著

十字街

(津田青楓表裝)

著者の人生、殊に異性に對する理解と同情とが、漸くひろく成つた時代の作である。若し『自叙傳』を以て異性をアッキュースするものとすれば、これは異性を容すやうな心持で書かれたものである。彼は今や愛と憎みとを以て人生を見ず、靜に悲しみの眼を以て眺めやうとして居る。而もそれが彼の約束であるかの如くである。

實價金九拾錢送料金八錢

(再版)

鈴木三重吉著

小鳥の巣

(橋口五葉表装)

「想ふに今の日本の文壇にありて最ユニークな地位を占むるものは三重吉氏の右に出づるものは決してあるまい。芳烈な情調や鋭敏な感覺や、而して其に最相應しきフレキシブルな、觸れゝば血の出さうな筆致や、總て何人の追隨をも許さないものである。此意味に於て獨歩の境地を行く三重吉氏は、やがて我文壇に最新しき使命を持つてゐる作家であると言へる。」

(ホトトギス、文藝批評の一節、島田青峰氏)

實價金壹圓貳拾錢送拾二錢

(三版)